

ばならぬ。

『名利につかはれて静かなるいとまもなく、一生を苦しむるこそ愚なれ』とは、我が兼好法師の述懐である。誠に味ふべき教訓と云はねばならぬ。之を世捨人のたわ言等と見のがしては罰が當る。

世間には名譽あり、地位ある身分を持ちながら、邪念の奴隷となり、良心の有無が疑はれる人が往々見うけられる。彼の取巻連は勿論のこと、第三者迄が、やれ敏腕だとか、政治的手腕がある等と彼を謳歌して居る手あひのあるのは歎はしい。學問もよい。權力、金力も亦、〇不である。只之等が終局の目標であつてはならぬ。之等の奴隷でありたくはないのだ。邪慾の目標に到達するために其の手段を選ばぬ様な事はもとより沙汰の限りである。

重ねて切言する。我等は人として生を此の世にうけて居る事それ自身が大なる感謝である。『人とは理想に生きるもの』と、私は定義してゐる。ソフ・クレスは『天地間の最も偉大なるものは人間也』と人間を禮讃して居る。而してカントは『自然界の法則を造りあげるものは心也』と説く。此の心に理想が宿るのである。實にや『一心轉萬法』であつて、心―理智―理想

こそ人間の根元的要素である。理想なきむくろは主なき荒ら屋である。

心なき人の生活は禽獸に劣る事になる。但しいわれなき空想に憧れることは避けなければならぬとお断りしておく。

我等は徒らに物慾にとらはれ、物質文明の奴隷となつてはいけない。苟も萬物の靈長と自任する人間である爲めには、是非とも精神的に生きなければ造物主に對しても申譯はあるまい。そして我等の理想を實現する爲めには、非常の節制と渾身の努力とを以つて終始しなければならぬ。

蟻の生活は美事な統制を保全して居る。然しながら彼等は一般的動物の通性に倣ひ、本能を主體として居るのは争はれぬ。反之、人間は理智に生きねばならぬ。我等の法律に従ひ、道徳に律し、宗教を信じ、而して大自然の理法に合致せねばならぬ。時としては欣然尊き犠牲とならねばならぬ。然しながらそれは決して賤しい屈服であつてはならない。我等は嚴然として自由の域に立つ事を要する。

我等は正しく自己を知らねばならぬ『おれは生きて居る』―『おれは人として確かに生きて

居るんだ』と自覚し得たならば占めたものである。もとより此の際其の地位や職業の如何は論ずるの暇はない。不足を叫ぶ人には不足が追ひかけ、感謝する者には幸福が舞ひ込むのである。「知足第一富」とは此の謂である。我等は正しき心の確乎たる持主となり、眞の自由人としての生を深き感謝と敬虔の念を以つて悠々甘受したいものである。

白萩に白き胡蝶のやどり居り

(昭和九年十二月「工明會誌」)

漫言

人間と云ふ奴は全くエタイの知れない動物であつて、恰も鶴の様なものであるらしく私に思はれる。私は舊臘轉居して以來、毎日の様に洛北百萬邊から町に出で、電車によつて京都驛にかけつけ更に汽車に乗つて大阪驛につきそれから堂島の藤田組までテクル。それには二時間餘りを要する。歸途は丁度此の逆をたどるのが私の日課であつて之が池田謙三と云ふ符牒の付いた動物否 Piston rod の one journey である。此の長い時間の中には種々雑多な人間を見るのだが、何とも思はなければそれで済むが、偕て一寸氣をとめて熟々觀すれば仲々に興味が湧いて来る。洋服あり、和服あり、七三もあれば耳かくしもある。若き老ひたる、傍若無人なる、慇懃なる、靴あり、下駄あり、其の靴と云ひ、下駄と云ひ千差萬別極まりなし……こんな下らぬよだれを流しても際限がないが……つまり人間屬と云ふものを客觀すれば實に妙な動物であつて、何んとなく吹き出したくなる。

彼等は Science を論じ、Human life 即ち人生を研究し、Love を語り、而して誇大妄想な先生達は Nature をやへ征服とやらせんとわめきさわいで居るが片腹痛い心地がする。それ Metallography、だ Diagram、だ、Copper Metallurgy、だ等を云々する亦此等の部類に入るので、先生は先生、學生は學生で、それ Print, Note、それ Mark が何點等と騒いで居る。考ふれば考ふる程おかしい気がする。

何故人間は鶴？我等は鶴の本體を知らぬと同様、人間の正體をはつきり捉まへる事がなかなか困難であるではないか？論より證據、俗物共の憧憬的であり、國民の最高位と自惚れて居る？ Prime minister や、吾こそは日本國政を Cook、せんと夢みつゝある「三三」Cook 長の行爲や心事は如何である？不信任案、解散風、停會而して妥協、此等が殆んど Simultaneous に起るに至つては沙汰の限りである。陣笠連の面喰ふのは勿論だが、國民亦あいた口がふさがらぬではないか！ News 曰く……解散の脅威から妥協の安易へ、政戦の舞臺が——變じて陣笠の頭痛よりも樂屋で手品を使つた親方連の頭上に楚歌の聲が集りだした。三黨首は今「暗黒政治」と云ふ不氣味な世間の聲に耳をおほふてゐるが、鈴の音は鼓膜を破るやうに高

鳴りする……此の前半は當れりだが後半は頗るあやしい。鶴の眼玉は前にあるのか後にあるのか？ホンニ蛙の眼玉の位置よりもあやしく、それをのせて居る眼玉が亦ぐらぐらして居るから News 屋の叫ぶ程には連中にはこたえぬ。鈴の音は鈴を鳴らしてゐる者に一番手こたへがある位のものだ。尤も其の鈴振りも亦飯食ふ方便ではこたへも少ない。床次大將を順慶々々と呼んで居るが、どれもこれも順慶君であつて誰れか烏の雌雄を知らんやである。慾に目がない鶴的動物の仕業が皆これである。こんな Minister や黨主連乃至は陣笠に料理せられてゐる、國民亦タカが知れてゐる。矢張り鶴の子供の格である。尤もこんな状態が何も日本にのみ限られた事でないから安心し給へ。朝と晩とは正反對であると同様、彼等の心事亦朝令暮改、萬事は鶴的である。しまひには自分で自分がわからなくなる。故に佛曰く諸行無常一切空……噫……。

一切空！此の空は Empty ではなく、"Changeable" の意なりと云ふ。有難い教へである。Nature Changes! 故に吾人の心事亦猫の眼の玉の様に變化すべし等と逃げ口上は許されな。我等が嘗つて畏敬せし恩師故渡邊渡氏は其れ將に逝かんとした時、折柄病床を見舞はれた桂博士の手をとりて、「君！世の中は夢だよ」と述懐された相な。故渡邊博士はかねてより禪

を學びし達人であつた。此の人にして此の言あり、夢が世か、世が夢か？ 觀様によつては世の中は夢であらう。五〇年の人世は Death と云ふ Eternity と比ぶれば夢と觀するも不可なしである。然しながら、私思ふに之は客觀的の話である。人間と云ふものより主觀すれば Life は全く Real である。

Longfellow も彼の Psalm of Life に云ふに居る…… Tell me not in mournful numbers, Life is but an empty dream…… Life is real, Life is earnest……云々、余云々 yes indeed! 生命即生存は現實である。生存程眞劍味を帯ぶるものはなし。要之、Life を Dream と云ふも、Real と云ふも觀方に依りての區別である。現今の流行語にて云へば、見解を異にするのであつて Both are correct である様だ。

白狀すれば、私自身も悟つて居らぬ爲か、My Life に對する見解も此れ以上に知らうとは考へて居らぬし、別に深く悲しみもせず迷もしない。私は My life is real で満足してゐる。人間 = Human being—此の being は現在の連續の狀態を示す事であり、Real Existence を語るものと思ふ。我等は生を知らぬ、何んぞ死を知らんやである。我等は自身の要求や願望によ

り、此の世に生を得たのでない限りは勝手に死ぬべき筋合のものではあるまい。即生も死も知らぬのだ。私は人生に對して Scientific equation を與へた。——即ち Human Life = $\int_a^x \ln$ -stant! 但し My life に向ひては a = Sept. 20—1882 であるが x は勿論 X である。私は過日偶然大阪の丸善で Lord Ansbury の “Pleasures of Life” と云ふ小冊子を一寸のぞいた。恰も廿五頁第六章 Value of time の項に “Each day is a little life” とあつたから、同感に思ふて大枚錢を投じて一冊を購ふた。其中 my piston cylinder の中で讀んで見る積り。唯108頁の小本だから諸君も見たら面白いと思ふ。外國では “Time is money” と云ふてゐるが、私は “Time is more than money” と云ふて居る。何故なれば Money は Recover 出来るが Time は Recover 出来ぬからである。此の小冊子にも…… Time is often said to be money, But it is more—it is Life とある。賛成々々 A 公も僕と同意見なのは有難い。金より大事な忠兵衛さんの Life でもわかるではないか。所謂「生命あつての物種」と云ふ世謬も之だ。然し時には「一文惜しみの百知らず」と同様、金あつての生命と思ふ不心得者がまだ澤山あつて馬鹿にならぬ。金に生命を奪はるゝもの、さゝぐる者は世間周知の實狀で誠に

悲しむべく罰當りと申すべきではないか？

私の Definition によれば Life は instant の集合である。刹那々々が Life となる。極言すれば生命は即ち刹那となる。よく人が云ふ、セツナの楽しみ、戀の樂はセツナなり等々（尤も之は私の味ひ知らぬ處であるが）。つまり人生は刹那、刹那が人生であると思へば一刻も油断はならぬ。此の大事な Instant を空に過してはいけぬ。所謂「明日ありと思ふ心のあだ櫻」てな事を忘れてはいかぬ。我等は過去を追及してはいけない。追及しても及ばぬからである。吾等は未來を語るべからず。語るも未知であるからだ。來年の事を云へば鬼が笑ふも此類である。

Human being の實體は Present 即 The instant にある。Instant を miss しては何の future があるものかである。ボンヤリしては One bird in hand is better than the two in bush である。徒らに考へて居るよりは働くべきだ。尤も人間は慾の動物である。慾がなければ恐らく人生もないだらうから Future に對する Hope を保持することは一向差支へない處ではなく、人生には必要である。只 the desire, hope, wish は Plus sign 即ち “Goodness” に向つての慾であつて minus sign 即ち社會に對して “Badness” を興くす世間を Spoil する種

類の慾ではありたくなく。Human being には、人格即ち Personality がなければならぬ。之がなければ Human ではなく。日本人は大體 Weak personality である様なのは大いに遺憾である。Wisdom, feeling 及び will 共に何れも weak である。特に其の Capacity 亦かなり小さき嫌がある。所謂島國根性は有難からぬ點である。

島國根性とは物に動じ易い、氣が短い、熱し易く冷め易い。之等は國民の健康とも大關係があるが、其弱點は第一に改正すべきである。我利慾が強ければ兎角種々の苦勞をなし、術策を弄するから色々氣が變る。之が火急になれば自然氣が短くなるのだ。之がいかぬから大いに避けたい。我等は常に偉大なる人格を要求する。私としては人間仲間の近い例では大西郷の偉大を崇拜して居る。議論畢竟世に効なし、山は青々花は紅也である。

噫々偉大！然しナポレオンや豊太閤の偉大さでは餘り感心せぬ。家康の狸爺の如きはもとより論外である。慾を度外視した偉大さがありがたい。此の點については私は先年大いに感じた一事がある。それは私が初めて金屬工學科の教室に來た一九二五年五月春の最中である。丁度花時で榴ヶ岡や櫻ヶ岡等、到る處サンザメいて居つた時だつた。洛陽の櫻に飽いた私は仙臺

の雑騒に迄入りこむ勇氣はなかつた。處が一日早朝西公園のほとりから偕行社前を散歩した時、あの往來の眞中に頑張つた堂々たる喬木を見つけた。それは三抱へにも餘る亭々十數丈、幾百歳の老樗であつた。此の木は昔伊達安藝の屋敷の内の木であつた相だ。私は堂々たる其風采を仰ぎ見て其の偉大さに打たれた。純眞にして温乎たる偉大！彼は恐らくチヨコ才なる正宗を解すると共に、安藝の心をも知つてゐるだらう。彼は物云はぬ。されど云はざるは云ふに勝る無言の行、沈黙の言をなしてゐる。私は初めて彼を見し時直觀した。即ち「生物（佛者の云ふサトババ）の中で喬木が一番偉い」と。ライオンや象乃至は鯨の偉大を以つても到底其の風姿に於て、大さに於て、且つ天壽に於て比較にならぬ。論者或は云ふ「人は最も強い、喬木でも容易に伐り得るではないか」と。其れは誠に然りであるが、それでも人間は喬木の偉大さを毫も傷けることは出来ないのだ。

人間仲間から其のウヌボレ根性を以て主觀的に眺めたなら、生物中人間程偉いものはないと勝手に威張るであらうが、第三者から客觀的に觀察せば、人間と云ふ Moving creature は最高位の生物かどうか少々疑はしい様だ。尤も人間は可なり複雑な動物であることは事實らしい。

慾的動物たる事も否みがたい。然しそれ故人間は Higher rank の動物だと云ふ事は首肯しかね。Human が Highest class だと威張れる點は果して何處にあるかと云へば Intellectual, moral and spiritual なりと云ふことであらねばならぬ。只全知全能（即ち God）にあやかる様に善知善能的に生きるならば吾等は初めて「最高等動物なり」と頑張るも、わけがわかるが、現在吾人は只其の道程にあるものとせば、どうも未だ未だ大手を振つて威張るわけには參らぬ様だ。考へれば考ふる程忸怩たらざるを得ない。

私は物質の不滅や、勢の不滅を信すると共に、Spirit 即ち靈魂の不滅をも信する。Spirit は所謂幽靈を指すのではない。お釋迦さんを始めとし、大聖ソクラテスの偉大な靈魂は不滅であるし、乃木將軍の Spirit 亦不滅である。此の意味に於て我大和魂亦不滅である。「三ツ兒の魂百迄も」の世諺尤もである。只微妙微細な魂は往々吾等の耳目に感じない爲滅したかの様に思はれる丈けである。一九二三年三月四日夕健康其のものなりし我老父は七〇歳の高齡を以て突如として最後のカーテンを引いた。病氣は腦溢血。場所は小坂鱈山の役宅。丁度私は胃潰瘍の宣告を受けて東京の南病院で絶對安靜を命ぜられた翌日の事だ。父の死に目にも會はず、葬儀に

も出られなかつた私は、罪障消滅の意味に於て、生命から二番目の煙草を禁めた。先達つて一九二七年一月十日の早晩、一ヶ年十ヶ月間左半身不隨の中風で、視力も可なり衰へてゐた老母は、第二回の尿毒症に襲はれて三日の間夢現の如く病床にわづらつて居つたが急に心身の衰弱によつて、眠るが如く故老父の跡を追ふた。行年六五歳、私は其時四六歳、生れて初めて死ぬ人を目撃した。而も我が生みの親、養ひの母である文けに感慨最も深いものがあつた。死は一切を解決する。余は約二時間の後、逝ける母の神々しき面影を拜して死の嚴肅さに打たれた。翌日余が母の骸は花山に於て茶毘に附され、間もなく Ash となりて壺中のものとなつて歸つて來た。肉體の變化は正に目撃された。而して其の Spirit は? Her Spirit は既に既に我等 8 Brother and Sisters にうつがれてゐるのだ! 噫吾人をして Big poet たる Wordsworth の "We are seven" の可憫なる詩によりて靈魂の不滅を物語らしめよ。

然し靈魂は果して人間のみの専有に限られて居るだらうか? 私は彼の老樺を見て靈魂の存在を感じた。何だか偉大なる木にも靈魂がある様に思へてならぬ。Science を學んだ者から見て「木に靈魂がある」と云ふのが、恰も三勝半七のくんだりの信者の様でおかしいとせば私は

敢て主張はしないが、私は此の老木から一種の靈感即ち Inspiration を受けたと云ふてもよい。之は偉大な純美から受けた感動である。と云ふ方が穩當であるかも知れない。吾等は我が大和魂を表現してゐるかの如き崇高なる富岳を仰いだ時も或る種の靈感を得るのだ。Hail! Mt. Fuji, the Spirit of Japan! 唯、私は此處に御断りしておきますが私は偶像の信者ではな
50

兎も角私は彼の老樺を仰ぎ見た刹那に於て、The spirit の存在を直感したと共に其の Greatness に波及した。彼には何等の邪慾はない。只純真即ち Absolute pure である。大自然の精氣を享くる事幾百年にして木の繁茂を示したのだ。全く自然と合致した生存を示してゐる。いとありがたい事だ。雨降らば降れ、風吹かば吹けである。眞に羨望に堪へぬではないか!

此處で私は吾等の教養特に性急な日本人の教養 Culture に向つて出来る丈け邪慾を去つて、上述喬木の様な偉大さを教訓としたいのだ。吾等の Education 吾等の Culture の目標は美にして完全なる人格の養成に他ならぬ。我等の教養の眼目は邪慾的な Human を作るのではなくて純真なる人間(たとひ慾は、あつても其の慾は少くとも靈的且つ智的而して道義的に向つての

慾ある者)を作る事であらねばならぬ。而も大自然に合致し得る體の偉大さが欲しい。

繰返して云ふ。我等の教育は人格の養成、純真にして偉大な人格の養成が主體であり、之がなければ Education and Culture の目的は無意味であり、學問の蘊奥も屁つたくれも、Non-sence に終る。只悲しい哉人間は Human であつて God にも Buddha にもなす。Human が Buddha に近づく時は即ち Super-being であつて Human-being の俗界を脱することになり、下界は頗る無趣味となる恐れがある。然し先づソナ勝手な杞憂等は抱く必要もなく、人間を神様に進化させる事は兎も角むづかしい様だ。「蜻蛉や飛びなほしても元の枝」である。どうせ人間は慾の固りである以上は、慾を全廢することは不可能であるは再三述べた通りであるが、せめて慾は慾でも、誠の人間の基礎で且つ要素である知識慾の教養に向つて相互に努力し、吾等の後進をその方向に導きたい。我等は決して赤化運動を恐れてはいけない。彼等の行動は一種苦しみの Struggle に過ぎぬ。どうせ一時的の現象と見てよろしい。明知善能のもとに、雲霧の様に消散するであらう。我々は飽迄も明知善能の涵養、純真にして偉大なる人格の養成に猛進し鶴を變じて金鶏の様にあらしめたい。妄言多罪陳謝々々。(昭和八年、「工明會誌」)

木魚のたわこと

内外古今を通じて世には箴言と言ふものがある。それはつまり金言と云ふ意味でもある。筆者も亦若人のためにその箴言なるものを物して見ようと思つたが、あやしくこそものぐるほしけれと覺え一その事「たわこと」と題して一文を草することにした。(木魚道人)

ラ・ロシュユオの箴言

有名なラ・ロシュユオ箴言録の劈頭第一に

「我々の美德は殆んどあらゆる場合假装せる悪徳に過ぎない。世人が稱して美德となすものは、通常、我々の慾情によつて形成された亡靈に過ぎぬ。人は己が欲する處を罰せられずして行ふために、それに體裁のいゝ名目を與へるのだ」

とある。之は今から二七四年の昔佛國ルイ十四世時代に於ける辛言である。現代にも果してよ

く適應するや否やは知らぬ。又曰く

「不正が一方にしかかなかつたら、喧嘩は長く続くものでない。」

と、之などはなか／＼意味深長とも云ふべきか？ 或は不都合な浮言と稱すべきか我れ之を知らぬ。

汝自らを知れ

「汝自らを知れよ」とはギリシヤ七賢人の一人キロンが言ひ出した相であり、「知は一切の初めなり」と大哲ソクラテスが教へたと聞く。何れも有名なる箴言即名言であると覺ゆる。さりとて大學まで入つて苦勞して學ばずとも人間である以上自ら若干は知つても居様し、汝自身を知らずとも結構世の中は渡つて行け相でならぬ。考へ様によつてはそれでもよからうが、更に人間として一步退いて熟慮すれば、先づ自らを知つてよく學び、よく知り、よく信じ、而してよく行ふことが出来たならば、即ち信行知三位の統一が出来たならば、所謂立派なヒューマンとして自己の實在を樂しみうべきものと思ふ。只人間は要するに人間である外何者でもない人間

即 *Imman-Being* と考へ、そしてありの儘生きるのがよい。虚構は避けたい。彼等は大きくしてエライ者ではない。大自然に對して人間の力はいと微かである。彼等は天と地との中間に介在する。彼等は神様でもなく、又餓鬼でもない。我々でないものに見えようと努力するよりは、我々のあるが儘に見せる方が榮であり且つ反つて得る處があらう。

大慾は無慾に似たり

大慾は無慾に似たり。餘り慾張つてはならぬ。

「人間全體の受くべき筈のものを

この内の我で受けて味つて見よう。

この己の靈で人間の最上のものを据ゑて歡喜をも此胸の中に積んで

此自我を即人生になる迄擴大して

途にはその人生なるものと共に滅びて見よう。」

之は新しき生への出發に際してファウストの宣言した言葉であつた相だ。彼の如き實踐力と

追求力は賞むべきであるが、彼の如き貪慾と彼の如き自我とは到底この尊き人世には許さるべき筋合のものではあるまい。

新學士を生めるさる母親は云ふ。私の息子のお嫁に「別品で、丈夫で、そして頭腦が優秀で、立派な家庭に育つたお方が」無いでせうかと。相當慾ばつた話で、先づ以て無理な註文とお答へしておく。こんな親切(?)な母親を持つた人は果して幸か不幸か? 我之を知らぬ。然し「先づ己を知れ」である。

労働は神聖なり

「労働は神聖なり」と云ふ。果して眞? 労働だけが神聖であるのか? それとも労働でも神聖であると云ふのか? 従来は労働するもの即ち労働者とか労働者階級と云へばスグサマ劣等社會の者共を指す様な感を抱かせられたものである。然るに共產主義者が日本に入り込むようになってから労働者が威張り出して來た。就中一九一九年十月米國のワシントン市で開催された世界労働會議に日本からの選出者もそれに参加した頃から、彼等の鼻息が急に荒くなつて來

た。其結果彼等は労働は神聖なりと大ぶろしきを擴げ出した。彼等は果して労働なるもの、眞意義を理解して居るやさへも疑問である。當時一般の蒼白きインテリを初め、各種のサラリーマン即ちサンドウィッチメンも亦いや／＼ながら之に共鳴させられ、彼等自身は精神的労働者なりと叫び、従來の労働者たる所謂筋肉労働者と相並んで労働なる美名を奉戴する様になつたのであつた。

抑々英語のレーボアなる言葉をウェプスターの辭書で調べて見ると、其一つに

“Labour : physical or mental toil-exertion : Human effort, bodily or mental, made wholly or partly for some other than the pleasur directly arising from its performance”

と云ふ風に述べてある。従つて蒼白のサンド君でも人類社會へ貢献すべき有意義な目標に向つて勤める時は労働者であると自稱しても差支へないわけであるが、只徒らにそれが自己の口が乾ボシにならぬ爲、又は安價な娯樂を求める爲の勤め人根生に動いて居るものとせば立派な労働者であると申されまい。

當時私は小坂銅山の冶金課長をして居つた頃であるが、一夕東大冶金の實習生を御馳走した

事がある。其席上學生の代表者が謝辭を述べるべく起立し、「労働は神聖なりと申しますから私等も大いに労働します」云々と云つたものだ。私は折返して「労働とは何ぞや？」と反問した處がニヤンとも返辭がないので、私は失望しながら彼等に説明した。曰く「労働は神聖なりと云ふのは労働者が眞意を解し、よく其責務を盡した上に於て初めて神聖なりと叫び得るものである。労働の目標は何處にあるか？ 其効果は如何に現はれるか？ といふ事を知つて粉骨碎身するならば初めて神聖なりと云ひ得る。然しながらその神聖は必ずしも労働者の専有物ではない。鑛山長でも、小使でも、學者でも、學生でも、藝者でも、レヴューガールでも、何でも彼でも、各自其義務を盡した際に於て神聖なりと力み得べきものであらう。只労働者であるが故に直ちに神聖なる生涯を送つて居るとは申されまい。要はその精神にあるのだ」云々と説いたのであつた。

職業に貴賤なし

「労働は神聖なり」と云ふ諺はつまり「職業に貴賤なし」と云ふ箴言と似た様なものと解釋する方がよいであらう。手つとり早くいへば、先づ以て氣やすめとも考へ得る。然し眞面目に考ふれば之等は頗る重要な教訓を含んで居る。上は國務大臣より下は巡査に至る迄、職名や官位自體には貴賤はない。各自其職責を盡した場合に於て尊重さるべきものである。只其間職業にそれ相應の差別丈けはある。

と云ふて何も大臣であるから威張つてよいといふ理合のものではない。佛教では「一切平等無差別」と説いて居る。之は赤の連中が云ふ様な猫も杓子も絶對平等であると云ふのとはわけがちがふ。無差別の中に差別があるのだ。

差別は世界の實相であるが、平等あつての差別であるから、差別の一面に執着して、平等の一面を閑却してはならない。日本人のある連中は兎角大和魂の義理的方面のみを振舞はしたがる癖があり、小さな體面的義理即ち虚榮に凝り固まり平等的仁道の後廻しにし、眞の犠牲的精神を没却する者が少くない。人を見ればすぐ對立態度になり抗爭の結果、一と勝負をつけたがる嫌ひがある。之をば彼は「ファイト」に富んで居る等と賞讃したがる様である。その意氣は愛すべきだが、まだまだ度胸が小さい。眞の大和魂とはそんな安値なものではあるまい。それ

は武士道であり克己であることは毎度私が力説する處である。福澤翁は獨立の旨は深く之を心の底に藏めて自ら守ることを主義とし、人に接するに寛大にして大海の物を容るゝ如くなるべしと誨へ、一身を持するに伯夷、人に接するに柳下惠の心持なるべしと説いた。爾は爾、我は我、之は差別觀とも見えるが、窮達一如清濁不二は立派なる平等觀で此の無頓着な柳下惠の襟度は、また一段と大きく見える。畏敬する先輩某翁は七十年にして一如行得の體驗として如何なる事件人物に遭遇しても之と對立關係にならぬ様、之と一如になる様に努力するのが人間の義務であると云ふ信條を表明した。

働かずんば喰ふべからず

「一日働かずんば一日喰ふべからず」と歐米人は教へられ、我等亦之に共鳴したものである。然し近頃になつて何處となく嫌氣がさして來た。退いて考へて見ると、之がバク臭い。其言やよしであるが、其源は利己主義即打算的考察から出て居る様である。私などは屢々病氣をした爲一日どころか半年も働けない事があつた。然し喰はねばならぬ。醫師は營養物を十分とれと

さへ云ふ。働かざる者は喰ふなど云はれても、生き物である限り喰はざるを得ない。又云ふ、どうも喰へぬから私は働くんだ」と。之なんか飛んでもない誤解である。餘りに意氣地がなくて涙がこぼれて來る。世の人々は兎角、喰ひ過飲み過で死ぬのであつて、喰はないで死ぬ者は饑饉の時か、胃癌患者位のものであらう。乞食だつて仲々死なない。神様が我等の生命をあづかつて下さる間は樂には死ぬぬものゝ様である。喰へぬから働かねばならぬ等云ふ奴等は反つて虚榮心の指圖によつて働く手合に多い様である。他人が働かぬからおれも働かぬ等と色々理屈をこねる様な打算的な考へも面白くない。兎に角、利己的、打算的な文句はさらりと捨て、明朗な氣分で生きては如何だらう。つまり只端的に、我等の健康の許す限り、お互の生命ある限り、働ける間は働いて我等の生を全うしようと決心してはどんなものだらうか？ 丈夫である限り人は働くべきものである。それ丈で澤山である筈だ。我等の實生活には理屈は邪魔である。

中庸に曰く「力行近乎仁」・努力の行爲は仁に近いと云ふのである。仁の意義は深遠であり簡単に説明する事は出來ないが、此の場合では、人道の極致即至大至善の道德と解するが良いと

思ふ。努力こそは眞の人間を作り、天才を作り、人生をして最も有意義ならしめる泉源である
と信じる。

敗けるは勝

「敗けるは勝」と云ふ。果して然るか？ 敗は敗でしかあり得ない。それを勝と云ふのは解せぬ限りである。然し敗けた者を慰藉鞭撻する時によく此の諺を以てする。慰められたものは救はれた様な心地がするのである。之は一のパラドックスでもある。よく耐へ忍ぶ者は遂には勝つと云ふ意味ととれる。

同じ様な諺言に「知らざるを知らずとせよ、之知れるなり」と。知らぬなら大いに學べば遂には知る様になる、知らずして知つた振りするなど云ふ意味であらう。元來勝敗と云ふのは一の對照的表現である。甲乙相戦ふ時、一は優勝し他は劣敗する云ふのは戦の結果を具體的に表象し得た場合である。此際乙が甲に向つて参つたと云へば乙が甲に敗けた事になる。たとひ下に組みしかれても、敗けたと云はぬ限りは敗けては居らぬのである。蔣介石は日本軍に破れて

隅つこに追ひつめられ、今や正に雪隠づめになりさうになつても未だ敗けたと云はず、否反つて最後の勝利は我にありとぬかす誠に心憎い限りであるが、この分では彼の息の根を止めぬ限り、我は彼に勝つたと云ふことにはなるまい。

勝つた敗けたと云ふ眞の意義は、單純なる表象とか相互間の約束とか又は社會的概念のみによつて決定せらるべきものではなく、争ふ者同志の精神の如何によりきめられると思ふ。我思ふ、故に我ありと云ふ。我勝つ、又は我勝てりとは其精神を指すべきものと考へる。たとへ下になつても未だ敗けぬ、今にはね返し勝つて見せるぞとがん張る底の意氣が即ち敗けるは勝、否「敗けても勝」と云ふものであらう。我等のポートクリューは、勝つべくして昨年は敗け、榮冠を逃がした。本年の下馬評も亦Tのものと知られたが又もつゞけてMにやられたのは残念である。然し明年は勝つであらう。そして毎年つゞけて勝つ様お祈りする。然し先づ己れに克つと云ふ修業を積むこと及び油断は大敵である。敵を知り、己を知り、而して克つ者は即ち勝者となり得る。

默善言不善

禪學では默善言不善と教ふ。默することは善にして、言ふことは不善なりと云ふ。之では大學の先生等は皆不善と云ふ事になる。但し不良でなくて未だ仕合せであらう呵々。禪の大宗ダルマ禪師は面壁九年と傳ふ。隨分辛棒強い次第である。そこで禪は不立文字と云ふ。先年某禪學者が遙々禪學の講義に獨逸くんだり迄出かけて行つて、最後の悟りに「おれは馬鹿であつたと非常に感心した」と云ふ妙な話がある。つまり彼氏は默善言不善の逆をやる爲に態々歐洲へ出かけた事になつたのだ。

然し此の教は只文字通りに「云ふこと即不善」と解するよりは、「云ふて行はぬものは不善也」と解釋すべきものと思ふ。つまり之は默行善、言不行不善と敷衍して讀むとよくわかる様である。即ち默して行へと教へ、不言實行を力説した諺と解するのが妥當であらう。

哲學とは何ぞや

「哲學とは何ぞや」とは昔から學者のトピックである。彼等は之を食ひ種としてゐる。ありがたい哉である。然も彼等は之を形而上の學問なりと大いに威張つて居る。一寸をかしい心地がする。工學部の奴等は形而下の學問をして居る機械的存在であるかの如くぬかしてゐる手合も居る。餘計なお世話である。

然らばその哲學とは何ぞや？ 或者曰く「哲學とは人世思考の學也」と。妙々。之は頗る簡單至極。某新哲學論者曰く「我等は只先人や同人の哲學を聞きそれを理解することを唯一の目的とせず、更にそれを土臺として自己自らの哲學を樹立することを意圖するものでなければならぬ」と。愈々鼻息が荒くなつて來た。又云ふ「今暫定的に云ふことが許されるならば、哲學はもと／＼事物の、特に人間生活の本質を認識し、その價值若しくは意味を評價するものである」と云々。かくて彼等の説く處は種々雜多で盡くる處を知らず、行く處も決定しない。彼等は認識を論じ、存在を叫び、而して價值に就いて議論する。彼等に於て大いに價值ありと信ずる迷論も、我に於ては全然無價値の甚だしいものがある。現代の彼氏等は、依然として昔のプラトンやカントに依つて養はれて居る様に見える。カント大明神と神社でも建立して祭つては如

何。

一夕我等の同人十數人の集ひを催し世情を論じた。學者あり、文士あり、音楽家、書家、乃至美術家あり、其年輩は四十歳より七十歳に互つた。そして談偶々哲學に至つた。甲論乙駁もとより盡きるべくもない。つまり哲學とはわかることをわからなく説明することである、と云ふ事に衆議一決してホツとしたことであつた。之に類した事が幾らでもある。曰く「學術とは何ぞや？」之は先年日本學術振興會が成立し、其總會が開催された席上、先づ呼び起された問題であり、それが容易にけりがつかかなかつた相である。之では火事が起つてから何の範圍を火事と稱するかとさわぐ様なものである。「經濟學とは何ぞや？」等も面白い議論である。經濟學部の連中は如實に議論に花を咲かして居る。然し隣り近所に迷惑を及ぼさぬ範圍に於て鬭争してほしいものである。

更に「冶金學とは何ぞや？」それは金屬處理の學也と、簡単に片付けることが出来るか如何か？「銑鐵中の炭素の問題」、「マグネとは何ぞや？」等々。最も大なる謎は、「人間とは何ぞや？」であらう。かくて「何とは何ぞや？」は到底盡くる處を知らぬ。遂には何が何やらさつ

はりわからなくなる。大西郷曰く「議論畢竟世に效なし、山は青く花は紅也」と。ルソオ云ふ「大自然に歸れ」と。木魚も亦此の境地に入るを樂しむものである。

死と直面せる末持君の通信

發信後丁度一週間目に、私は戦地にて名譽の負傷をした末持工學士からの第二信を受けとつた。大いに興味ある通信故左に全文を掲げることにした。

拜復御親切なるお手紙二十八日難有拜見しました。色々御心盡しの程、只感謝の外ありません。其後經過順調であります故御安心下さい。此前手紙を差上げました頃は、未だベッドに横はり、用便にも苦んで居りましたが、只今では軽度の散歩も可能になりました。(負傷後丁度一ヶ月)今度の負傷は討伐中であり、又配屬部隊の軍醫殿は漢口作戦中終始行動を共にし、私の事をよく知つて居られたので治療も十分に戴き、又急速に後送されて幸ひでありました。

傷は迫撃砲弾破片創で腋窩に近く脊面よりの盲管でありました。骨折は左上膊骨の上端より

五乃至八糧に互る部分ですが、見事に癒着しつゝあります。今後まだ日数は大分かゝると思ひますが、全治致し再び戦友達の處に歸りたいと思ひます。召集されてから丸一年四ヶ月、此の間私は他の學友達と異つて一兵卒として、戦闘に参加して來ました。部隊の特殊性のため幹候志願を止したのでありますが、軍隊と云ふ特殊世界の中に丸一年有餘兵卒として教育されたと云ふ經驗は生意氣ながら Man-Engineering を理解するに大いに役立つと信じます。

何時であつたか先生はおつしやいました。

「學校教育の結果は、學校で習つたことを忘れ去つて後に残るものである」

と。絶えず死と直面しつゝ働いて來た私には、此のお言葉が意義深く想ひ出されるのであります。

此の病院は××大學にあります。患者の一部が收容されて居る病棟は化學部でありまして、五階建の堂々たるものです。設備は今ではスッカリ片付けられて窺ふよしもありませんが相當整つて居たと想像出來ます。此の外幾つもの立派な教室の外、帝大の屋内プールに匹敵すべきもの、堂々たる屋内運動場、豪壯なる音楽堂等、羨望すべきもの許りであります。ドウセ英か

米の資本によるものでありませうが、一帝大の建築すら容易にはかどらぬ日本に、支那にかゝる文化施設をやれと望むのは無謀でありませうか？ かく考へるとたまらなく淋しく思はれてなりません。

支那を討伐して歩いて最も驚くべきことは網の目の様に張られて居る教會であります。如何なる部落を攻撃してもその部落に目立つて高い十字架のある教會を見る時私達は寧ろ憎惡の念をさへ抱きました。かうした地盤に日本の文化を浸透させようとする仕事が如何に重大且つ難儀であるかは推知されます。そして又それが一番大切な仕事と思ひます。左手を牽引して居るため大部疲れました。又後にたよりを差し上げる事に致します。右御禮まで。敬具

五月三十一日

北支派遣軍杉山部隊、榎野部隊、第一別館甲病室一號室

池田先生

末持春夫

末持君は昭和十二年三月、我が冶金學科を卒業された山形縣人であり、四月三菱研究所に入

つたのであるが、一年もたぬ間に應召、高田の聯隊に入り、やがて時至り雄々しく出征、先般左手に負傷されたのである。負傷後一週間にして同君より小生宛にて戦傷の通知があつた。私は早速慰問の手紙を差出すと共に、冶金學教室一同にて若干の據金をなし、書籍、食糧品等の慰問品を送つて上げた。品物の届くのは手紙よりは半月餘りも後れるので、未だ入手されぬが、とりあへず前記の禮状を出されたものである。私等は末持君が一日も早く御全快されるよう切にお祈りして止まぬものである。

委員から與へられた原稿用紙も丁度種切れとなり、私の右手も大分疲れて來たので、此の邊で一先づ擱筆しよう。(時の記念日六月十日の晩稿にて)

(昭和十四年七月「丁友會報」)

洗心録

一序

何の因果か？ 去る十五日は私にとつては厄日であつたと見える。まづ登校の朝、新宿驛で省線へ乗換の折、ある若者にコッピドク足をふまれた。彼は恐縮してあやまつたが、私は幸ひ笑を以て酬ゆる事が出來た。あんな不安定な若者の將來が思ひやられて不憫に感じたのである。その夕べ、小田急線により成城の寓居に急ぐ途中、とある踏切で我等の車がトラックと衝突、幸ひ人には別條もなかつた様であるが、お蔭で一時間はタップリと引き止められた。空腹時、日ぐらめの一時間は可なり待遠しいもので、やつと經堂に辿りつき、そこで故障車からおろされた頃は遠方から梟の鳴聲が聞えて來た。小田急はドウ考へても急ではない。一層のこと爾來小田急と變名した方が反つて落ちついてよからう。兎も角私は命に障りなく玄關をまたぎ、何

時もよりは甜く夕飯を口にし得た事を感謝したのである。朝にある事は晩にもあるとはよく云つたものだ。

處がその晝には最も閉口させられた一事が起つた。それは丁友會の某君が藪から棒と原稿用紙を私に突きつけての膝詰談判、「大學と工場」とか云ふ一文の執筆に對し半命令的の強要であつた。而も五月一杯にとの期限附である。丁度借金の催足にあつた様な體裁である。然し二、三押問答の中に私は考へながら、「ヨーン何か書かう」とおとなしく引き受けたのである。あてられた茸汁「老いては子に従へ」である。家庭に於ける good father は學校では good teacher とならねばならなかつた。某君の態度が稍々不遜に見えたものだから、側で聞いて居つた某氏は「アンナ不躰な頼み様なんてあるもんじゃない、私ならばガンと叱り飛ばしてやる」と大いに憤慨して居つた。私としても餘りいゝ氣持はしなかつたが、野人禮に倣すと寛恕したのである。それに依頼された事は我が丁友會の若人達の爲とあつて見れば、之に應ずるのは私の義務の一端とも考へたからである。

兎も角、あの日はイヤにうつとほしく、何處かにある低氣壓の加減で人々の頭が少し變になつて居るのであらう。それかあらぬか、晩には遂に雨となつた。こんな發端から出て来る私の管見も或はドウか？ 痴人の夢物語りとならなければ仕合せである。

二人材の養成

今や緑したゝる如き好季であるが、やがては焼くが如き炎熱を迎へる。そして學生諸君は夫工場の見學又は實習への旅途につく事であらう。その日の來るのがさぞかし待ち遠い事と思はれる。我等は此の陽氣につれて日々に衣をぬぎ衣を更へるのである。過般二・二六事件突發の大騒の後をうけて廣田内閣は成立し、やかましかつた選舉肅正も夢の如くにすぎ去つた。臨時議會の戦線各處に異状を呈し、不穩文書取締法案の如きは怪文書取締に限定されて漸く峠を越した。骨抜縮のふらふら法案、庶政一新が泣き出し相であるのも氣の毒ながら、身から出た錆と我慢せねばなるまい。民政黨の大先輩齋藤隆夫氏の舌端火を吐く慨があるかと思へば、七十四歳の大老町田忠治氏は老軀に鞭打つて政黨政治の爲に努力すると共に、黨内人材の養成に向つて悲壯なる決意を固むるに至つた、とニュースは報じて居る。悲壯と云ふ字句は若人達に

は一見不可解ならんが、熟慮すれば其意味深長であつて、曰く一寸云ひがたしである。然し少くとも民政黨總裁は、「更生の意氣に燃え、人事刷新に腐心して居る」と云ふ事だけは、確かに窺はれる。遅れ走せながら御大鈴木氏を貴院に失ひ、久原氏失脚の後をうけた政友會亦等しく人物養成に重點を置くと傳へられて居る。誠に喜ばしき現象である。

日比谷の大角力は可なりの緊張裡に黒星一つを附けた位でケリをつけ、名物の泥仕合もなしに二十三億餘圓の大豫算も無事にパスしたのは御日出度い限りであるが、其間兩國の大相撲夏場所は民衆に向つては議會以上の興味をそゝつた。但し新聞が其紙面を割いた點ではもとより比較にならぬものがある。それよりも日比谷の議會は國家の重大事と云ふ點からすれば、勿論兩國の角力等とは比較すべきものではない。にも拘らず、大衆は角力なる國技に對しては議會よりもより以上の力コブを入れた様である。それは力競べと云ふ眞剣味に於ては相撲が議會に勝つて居り、且つわかり易いからであらう。鏡岩對双葉山、双葉山對男女の川、双葉對清水川の如き好勝負は申すに及ばず、就中玉錦對双葉の一番の如き天下のファンの賞讃措く能はざるものがあつた。双葉が常勝巨豪の玉錦を堂々寄倒した利那大鐵傘下がグーンと鳴り、幾百の

座布團が土俵めがけて雨霰と猛然と降り出したのである。強力を誇る廣田内閣も案外フラフラ腰、之ではシッカリした二枚腰の双葉山の禪でも擔がねばなるまい。かくて國技館の大花形たる壯漢双葉山は、強剛鏡岩と共に仲よく大關の榮位獲得にきまつたと報ぜられる。此處では只聲ばかりではなく、げに虚りなく逸材が養成され、登庸され、其實力が發揮されて行く。眞剣なる哉である。

三 理 想

私は平素から「人間とは理想を持てる生物」(satava 即 being)と云ふ様に人間を解して居る。若者には若者の理想があり、老人には老人の理想が無ければならぬ。漱石は云ふ。理想とは何でもよい。如何にして生存するが最もよきかの問題に對して與へたる答案に過ぎぬ。畫家の畫、文士の文は皆此の答案である。答案が有力である爲には明瞭でなければならぬ。所謂技巧と稱するものは、此の答案を明瞭にする爲に文藝の士が利用する道具である。道具は固より本體ではない。文藝には四種の理想がある。一は感覺物そのものに對する情緒(美的理想)、

二は智の働く場合(眞的理想)、三は情の働く場合(愛乃至道義的理想)、四は意志の働く場合(莊嚴的理想)、之である。此の四種の理想は文藝家の理想であるが、ある意味から云へば一般人間の理想であるから、此の四面に涉つて最も高き理想を有して居る文藝家は、同時に人間として最も高く且最も廣き理想を有した人である。人間として最も廣く且つ高き理想を有した人で初めて他を感化する事が出来るのであるから、文藝は單なる技術ではない。偉大なる人格を發揮する爲に或る技術を使つて之を他の頭上に浴せかけたとき、初めて文藝の効果は炳焉として末代迄も輝き渡る……。かくて文藝家たる漱石、ドグマチックなる漱石の理想は、明瞭に輝きわたるの妙味を覺ゆる。私は他山の石として彼の堂々たる抱負の一端を此處に紹介したのである。

四 理想と人格

角力には角力の理想があり、政治家には政治家の理想があり、我々 engineer には engineer の理想がなければならぬ。理想はあくまでも高遠でありたい。然しながらそれが空想に陥るの

は禁物である。何處迄が理想か？ どんなのが空想か？ 此處では只常識判断によつて定めて欲しいと丈け申上げておく。従つて更生の意氣に燃え、我等の理想に邁進すべしと云ふ事は何人にも最も望ましい事である。それは殊更に自力とか將た又他力とかと區別する必要はなからう。世の中は相持ちであり、萬事は相對的である。世には絶對の自力があり得べからず、又絶對の他力もあり得べくもない。我等は唯高遠なる理想の達成に向つて常に更生の大道を辿るべき事を、私は此處に力説すれば足りる。胃の持病ある技術家たる私は、胃病で死んだ大文豪たる漱石に改めて盾をつくわけではないが、何も技術家であるからとて其の理想は文藝家にをとると云ふわけでもあるまい。又其人格が各自の職業によつて高低あるわけでもあるまい。職業には貴賤なしといふ謬も之と相似したことわりである。然しお互は夫々高遠なる理想を出來る丈け旗色鮮明たらしめたいと云ふ點に於て、將た又我等の人格をして所謂二重人格たらしめたくないといふ點に就て、私は漱石と全く感を同じくするものである。大なり、小なりお互は天上天下唯我獨尊の所信を持ちたいものである。

五 安心立命

昨今は躍進日本とか躍進工業とか、無茶苦茶に躍進したがる。とても三段跳や義経の八艘飛びのさわぎでない。軍需工業其他所謂インフレ景氣のお蔭で我が工學部卒業生の就職率は百%以上である。それでも學生諸君は、依然就職と云ふ問題には非常な關心を持つて居るやに見える。學内に於ける卒業研究等も其處に相當重點を置いて居る様にも見ゆる。これが果して喜ぶべき現象か否か、疑はしい。就職と云ふ事を考へて居るさる若人は遠き將來を苦慮して、恩給の事までを考慮に入れて居つた。之等は加茂先生の「有備無憂」を極度に遵奉しようとして居るのかも知れぬ。然し過ぎたるは及ばざるが如しで、若い人間は餘り取り越し苦勞をせぬ事だ。こんな事までクヨクヨして居ると早速白髪頭となつて、動もすれば理想の美人を *Beauty* にする價値を失ふ恐れがある。

就職の確保等云ふ事は、煎じつめると「安心立命」と云ふ大道に到達せんが爲であらう。之こそは萬人の目標に相違あるまい。然しそれはなか／＼前途遼遠の心地がする。それには「時と努力」と云ふ *two functions* がものを云ふ。尤も安心立命の域に達する要諦は頗る簡單である。それは「自己の職務に向つて生命を投げ出す」と云ふのである。然しその實行は非常にむづかしい。先づ命を捨てると云ふ事は容易に決行出来ぬ。然も其捨て場所を選ぶと云ふ事が至難の業である。華嚴の龍や三原山に捨てられては兩親や學校が大いに迷惑する。喜ぶものはそこら邊の新聞位であらう。無益に生命を捨てるものは先づ狂人の類としか考へられない。華嚴の龍を死出の名所たらしめた元祖弱冠藤村操の如きも、矢張り一種の氣ちがひと見做してよからう。

六 生 命

凡そ人間程其生命に對して深き執着を持つものはあるまい。一寸皮肉であるが、それには面白い挿話がある。私が嘗て現場(工場の仕事場)に居つた頃、ある朝ホーリネス教會の若い牧師の來訪を受けた事がある。彼氏は以前其製鍊場で私の部下の一員として研究係に勤務し、忠實なる若者であつたのだ。教會に入つてからは熱烈なる信者となつたのは勿論である。されば

こそ工場を去つて宗教に専念する事になつたのである。其の時の話の要領は……

彼「今日はあなたに永遠の生命を得て頂きたいと思つて來ました。私は随分課長さんの御世話になりましたから御恩返しに参りましたのです。」

私「それはありがたう。してそれは如何すればよいか？」

彼「つまり「キリスト」を信じて下さい。さすればあなたは永遠の生命を獲得する事が出来ます!!」

私「私は私の命のある間、生きながらへて居られれば、それで満足です。折角ながら永遠の生命など頂戴しても仕方がない。只私は靈魂の不滅を信じて居る丈けで澤山である。然し君の御厚意は心から感謝すると云ふ私の返事を氣持よく受けてくれ給へ」云々

其頃私は人生に就て種々研鑽して居り、當時既に而立の歳を超えて居つた事として、「永遠の生命」等と稱する事の無意味なるを悟つた積りであつたから早速お断りしたのである。神を信する事によつて永遠の生命を得るものと信じて居る彼氏こそ、實に生命に對する無限の執着を持てるものと私はひそかに感じ、噫彼亦「只の人なる哉」と同情を禁ずる能はざるものがあつた。

所謂「死んでも命のある様に」と希ふ謬は一見無理の様に考へられるが、「永遠の生命」等と云へば一寸ごまかされて、何となく高遠な様に聽える爲、ふと迷はされたくなるのが人情であらう？

人々は口辯の様によく「命あつての物種」と云ふ。と云ふ事程左様に我等は生命を大事にする。そこで金も生命線であり、滿洲も生命線と云はれる。かくて我等の生命線は無限に増大するが、事實、我等の生命は古來から大して延びても居らないのである。之が人生の妙味であらう。それ故、人の世の中で命のいらぬ程強い者はあるまい。即ち此の觀念が安心立命の第一義となるわけである。命さへ捨てること云ふ位であるから、慾も虚榮もないわけである。尤もよく云ふ「金さへあれば命などはいらぬ」の如きお安い命は、勿論捨てられても迷惑至極であつて、之等は論外である。

七 現場の仕事

諸君の大多數は、學門を出でた上は何れ現場で働く事になるであらうが、一足飛びには技師

長、所長、又は課長、局長とはなれぬ。ウツカリ出世に熱中などすると、場合によつては上長を殺して見たり、疑獄事件の渦中に投ぜられたりして、新聞種を蒔く等の事もあるから餘程要心しなければならぬ。現在起つて居る大疑獄のため、國鐵工務首脳部は潰滅しようとして居るのを讀者は如何に観るのか？ それ處か、時と場合によつては職工以上の勞苦を積まねばならぬかも知れない。三年―五年と晝夜交代の勤務にも就かねばならぬかも知れぬ。それも塵煙の中、SO₂の中、又はNH₃の中に。或は朝七時から晩七時迄、十二時間も働かねばならぬのである。日曜、祭日毎に休暇ある等とは斷じて夢想してはならぬ。女房と子供等を日光の下で見る機會なしと我慢しなければならぬかも知れない。

新米の工學士先生は一職工、一職長又は先輩の技術者から種々冷評、酷使されるかも知れない。時には技術等はそのので、單に面白くもない帳面附とか、職工の番割とかをやらされる事もある。以上幾多の難關に遭遇して、「はて大學では先生はこんな事は教へて呉れなかつた」とか、「もう少しあの事を勉強して置けばよかつた」等と大いに面喰ふ事もある。漸く少し出世したかと思へば、職工と資本家との間に介在して所謂 Sandwich man としての微力と

苦惱をかこつ事もあるであらう。そんな場合、一體如何に身を處すればよいかと跪き迷ふのである。然し諸君は斷じて盲目的生存を續けてはならぬ事を私はお勧めする。

八 瘦 我 慢

私は學生時代から、「相當頑固な奴」として取扱はれて來た。會社に居つた頃は所長、總務連は愚か、社長からさへ始末におへぬ者と思はれた嫌ひがある。それでも二十年間は我慢をして、同じ會社に於て實務に従事し、方々の鑛山や製鍊所の掃除人夫を忠實に勤めあげて來た積りである。頑固と思はれた代りには我慢も自信も相當（或は相當以上）に強かつたと心得て居る。由來盲従は私の性分と合はぬものと見える。かくて私は漸く會社を離れて教職に就き、東北帝大を経て、當冶金教室に來てから早くも一年を経過した。世には捨てる神あれば拾ふ神ありとか。捨と拾とは似て非なるものである。捨が括となり、更に捨となる。今更ながら漢字は面白く出來て居るものをつくづく感心する。此の間の平生文相の漢字廢止論の如きは大いに熟慮を費すべきものと思ふ。大臣が代る毎に、漢字が假名文字となり、左書が右書となり、左傾

が減んで右傾がはびこる様では盲目ならぬ國民でも目が廻つて困る。

「チチヲダセ」は「父を出せ」？ 「乳を出せ」？ どつちかわからぬ。況んや我々東北人の如きは「チチ」の意味を土や穂とも、筒や砲とも間違ふかも知れぬ。「辨慶がな木鉈」類の滑稽ならまだしも、滑稽等とすまして居られぬ場合も生じ得る。若しお上りさんが田舎からヌツト上京して「六五四三(32) 内ノ丸」等と云ふ電話の横看板を見たなら、一體どつちから何んと讀むであらうか？ まあ餘り右往左往はせぬ事にしたものである。

閑話休題脱線御免、一體會社が私を捨てたのか、將又大學が私を捨てたのか、私が大學を拾ひ當てたのか？ 考へ様により様々になるが、何れにしる會社の技師が大學の先生になりすましたのは事實である。私の収入は半減したが、高等官四等の拜命を振り出しに過去十年來教官として依然感謝の生活を送つて居る。當初「先生」と呼ばれると他人事の様には思はれたが、一昔もたつた今日では「先生とはおれの事」なるかの様になれて來た。尤も學校で「先生」と呼ぶのは米國人が「Hallo Prof.」「Hallo Dr.」等と云ふと同様、或は日本の床屋で「オイ大將」位の處かも知れないが……。

不惑と耳順の間を辿つて居るこの私が、今後も幸ひにして健康で且つ過ちなく現在の状態を持續し得るものとせば、今數年は根氣よく私の瘦我慢を續ける積りである。私は「人間として正當に働いて居れば、自信を以て安心して生きて行ける」と信じ、之を motto として生きて來た。私は何も好んで諸君に頑固を勧めるわけではない。「頑固とか」「強い自信」等と云ふ事は、「所謂出世を望む人」には反つて禁物であらうから、其邊は可然御取捨を願ふ事にする。更に蛇足を加ふれば、所謂世の官吏生活に入つたならば殊に頑固は大障害となるらしい。「物云へば唇寒し秋の風」を念じて居り、柳に風と受けて居れば間違はないであらう。但し我慢即ち忍耐と云ふ一條丈けは如何なる場合、何人にも大いに必要であると云ふ事は改めて説法するに足るまい。政治家の目標は一國の首相であるらしい。之は恐らく彼等出世の apex であらうが、此の出世は必ずしも安心立命を意味せぬ。それどころか、氣の毒ながら出世の頂上などは最も不安心不立命な地位と解するのが妥當であらう。皮肉な話であるが、ある意味に於て乞食的生活程安定なものがないかも知れぬ。彼等には虚榮はない。衣食住の心配もない。機關銃をむけられる恐れもない。マア、昔のダイオジニスの如き此の類の達人であつたらうか。

九 仕事に溶け込め

冶金界の偉人にして我が私淑する E. P. Mathewson は "Stick to your job" と教へて居る。「仕事に執着せよ」、「仕事に熱中せよ」と云ふ意である。私は "Dissolve to your job" と云ひたい。「仕事にとけ込め」と云ふのである。冶金學では Liquid Solution と共に Solid Solution (固溶體) と云ふ術語がある。

Unique and best metal or alloy は大體として液、固の兩態に於て出来る丈け Homogeneous uniform quality のものたるを要する。お互は仕事に溶け込み、仕事と一身同體となり、固溶體たるべしと力説する。義務とか責任とか云ふ四角ばつた理窟をぬきにして、只巍然として仕事と同化せよと勤める。

私が嘗て現場に居つた當時、Mining and Scientific Press なる雜誌に於て "Panacea for sick life" (「なやめる人生に對する萬能藥」)と題する一章に於てコンナ事が載せてあつたのを記憶して居る。……(一)職工をいたはれ、(二)獲るよりも、より多く働け。……の二條であつ

た。何人と雖も「優越感」を持ちたくない者はあるまい。それは「與へ得る者の特權」である。それは金でも、權力でも、智力でも、勢力でも何んでも宜しい。我等が月給以上の働きをなして居る時は、即ち資本主に對して優越感を保持し得るわけである。資本主は此の様な技術家の首を切る事は出来まい。

仕事は一人の力では出来ぬ。多數協力、立派なる統制の下に、一體となつて働く事により始めて大成され得る。従つて仕事と直接關係ある職工の面倒を見、親切に彼等を善導すると云ふ事は、仕事の成否と大關係がある。人間の力は非常に Flexible なる處に妙味がある。機械の能率は斷じて 100% たり得ない。新造の際 100% のものでも、やがては 50% 又はそれ以下になるであらう。出力百馬力のモーターは八十馬力内外に使用する際に於て有効に働く丈けである。然し人間は使役の仕方によつては +200% ~ -200% 位の廣範圍に於て働きかけると云ふ事を忘れてはならぬ。運用の妙は一に心に存するのである。

十 努力

與へ得る者は幸である。それは與へられる者よりも幸であるのである。與ふべく努力するのは最も尊き努力である。凡て努力は人生に價値づける第一義である。努力は天才をも構成する。樂界の鬼才シューベルトは三十一歳で夭逝した。然し彼は女性のベートーヴェンと賞へられた天才である。一體天才と云はれる人々には、先天的のものと、後天的のものとの二種があると或人は論じて居る。一寸考へると同感の様であるが、熟慮すればドウも怪しくなつて來る。生れながら完成された天才等は如何にしてもあり得べくもない。之は我等の健康等の議論とは同一率に考へられるべき問題ではない様だ。

Schubert は *Myself*「自分の音楽は自分の才脳と貧困の産物である。そして自分が最も苦痛の状態にある時の作物を世人は最も好むらしい云々」。此處に努力の結晶が物云ふのを認めねばなるまい。樂聖 Beethoven は果して天才であつたらうか？ 否、否、彼の世界的傑物となつた大原因は、實に彼の「努力」であつた事は萬人の承認する處である。數學の劣等兒が他日優秀なる數學の大家となつた例等は往々耳にする處である。つまり興味と努力が天才を構成するのであらう。

Edison 翁は生來學問は餘り出來る方ではなく寧ろ鈍才の部類であつた。然し話家の云ふ、人には無くて七癖、有つて四十八癖の所謂癖の一つとして、仕事に熱中する癖があつた。之等は發明家共通の癖と云うてもよからう。發明の大天才たる彼の生涯八十四年間と云ふものは、此の尊ぶべき癖を以て終始したのである。百千の發明は凡て努力の賜であつた。彼曰く、「働け、自然の秘密を探つて、それを人間幸福の爲に利用せよ。而して常に光明の方面を眺むべし」と、かくて『樂天努力主義』を以て社會奉仕をするのがエ翁の眞髓であつたのだ。
Look on the sunny side of every thing! は米人の諺として我等にも好指針となる。

十一 倦 怠

一ヶ月が二ヶ月、二ヶ月が一年、一年が五年、五年が十年と、同じ方向に撓まぬ研究を重ねて行けば、其道の「オーソリテイ」となるべき自信が生れる。それが若し、二十年―五十年と持續されると、所謂天才として世界に認められ得るかも知れぬ。近頃はよく「ケンタイ」期と云ふ言葉が流行する。不都合千萬である。之は現代の流行物である。スピードとわめく連中は

氣が短い。急激なる變化を好むと云ふ惡癖が倦怠を生みやすい。移り氣の人は氣をつけねばなるまい。

萬有は變化して止む時がない。石でさへ變化増減はする。然し必ずしも急變するとは限らない。短氣は損氣である。少しは世を大觀するの餘裕があつてほしい。私とても物の變化を好まぬわけではない。日本の尺八や琴などよりも、西洋音楽が變化音律に富んで居るから好きである。然し、幸か不幸か、私は倦怠期と云ふものを知らずに通した。私はそれ程鈍感であつたか知らん？ 相當長い間、病床に横はつた事も一再ではなかつたがさして倦怠を覺えた事がなかつた。病氣の時は病氣の時で、相應する仕事を持つて居たのである。

仕事の倦怠、家庭の倦怠は未だしもである。若し夫れ、不幸にして生存のケンタイを覺ゆるに至つては、氣の毒と云ふより外に言葉がない。若し仕事に倦怠を感じる様な事があつたならば、メクラメツポウ働くがよいと思ふ。其中には又メートルが止つて來る事は請合である。我等の心は常に動いて居る。世の中も始終變化して行く。懸命に働いて居る中には我等の心境も落ちついて來るであらう。そして倦怠病に對する私の診斷は生れる。倦怠病とは急激なる變化

を好む怠け者がかゝる病氣である。そして仕事と生命の尊さを知らぬ連中に付き易い。一種の忌むべき時代的流行病である。其症狀は説明する迄もない。若し命がいらぬ様になつたならば其豫後は不良、注意すべし。其治療には「仕事役をねつて一丸とし頓服せしむべし。但し外科手術は可成避けよ」と云ふのである。

十一 Man Engineering

私は冶金の學生に向つて、常に「Man Engineering」なることを力説して居る。それは「人間操縦」と直譯してもよいが餘り適譯でもない。人間の制禦即ちコントロールと云ふ意味でもある。之は Machine Engineering 等と對照すべきものである。技術家は機械の操縦取扱を心得て居らなければならぬが、同時に人間の使ひ方も熟知して居らねばならない。人を自由に使ふためには先づ自己の操縦即ち Self-Control が先決問題となる。之が出来なければ收賄問題等にも引つかゝる虞れがある。

人間修養即ち Culture の必要が此處に生れる。それは單なる理論ではなく實際の體驗からす

る。従つて短日月では出来ぬ。幾度か難關を経て始めて獲得され、大成されるであらう。優良なる技術者たるためには必ず Practical Experience が絶対必要である事も亦同様である。それが即ち所謂 Expert と云ふのである。其處には終始一貫せる努力が第一義となる。多年あこがれの角帽をかぶりTのマークをつけた我が丁友會員は、先づ以て Best Engineer 即ち Expert (老練家) たる事を目標として居るものと判断されるが、それには上述兩種の Engineering をシツカリ身につける様努力あらん事を切望する。

十三 Sportsman Spirit

先月十八日午後三時、我等のボート・チーム Eight Crew 一行は、輝く希望を抱いて、花々しく東京驛を出發して、一路 Olympic の競争場に向つた。其の光景は賑はしく且つ涙ぐまじきものであつた。それは勝つた方がよい。然し勝つと云ふのが全部の目標ではない。それは實に日本民族として數千年鍛へられたる武士道即ち sportsmanship の發揚でありたい。私は只「男らしくやつて呉れ」とのみ希望する。其處には名譽などと云ふ虚榮心などさへ持たせたくないのだ。

彼等は只彼等のベストを盡せば満足である。一體運動競技の中で團體的競技には十分な統制を必要とする。就中漕艇の如き team work は一心同體となつてする努力に俟つものである。此點野球などよりは一段と其必要を認める。個人的には如何に優秀であつても、ピツタリと纏まらないと弱敵をも倒す事は出来ないであらう。勿論勝たんが爲には度胸(糞度胸と云つてもよい)が大事である。即ち所謂「ファイト」(fighting spirit)の旺盛が大事なる事は云ふ迄もない。然し勝たんが爲めに、下手な policy は禁物である。野球等には之が相當有効に働くであらうがボートには寧ろ有害なる場合が多い様に思はれる。

今年の夏、我が工科が C.T. を獲得すべき實力を有しながら不幸にして、之にやられたかの如きは、之が多分に禍されたものとして同人間に話し合つたものである。申乙力量の差が格段にあるものとせば、ポリシーも亦相當きよめがあるかも知れないが、それならば事實ポリシーなくとも矢張り勝てるわけである。特に強敵に對する場合には、飽く迄もスタートからひた押しにやる、死んでも漕ぐと云ふ意氣が必要である。勝敗は兵家の常である。運は天にあるから

オリンピックの結果は今から豫断は許されない。六分二十秒のタイムと、あれ程迄に研究して仕上げた立派なボートを以て一心同體となり、スタートより力漕に力漕をつゞけてガンバツクならばよもや毛唐にやられる事はあるまいと思ふ。

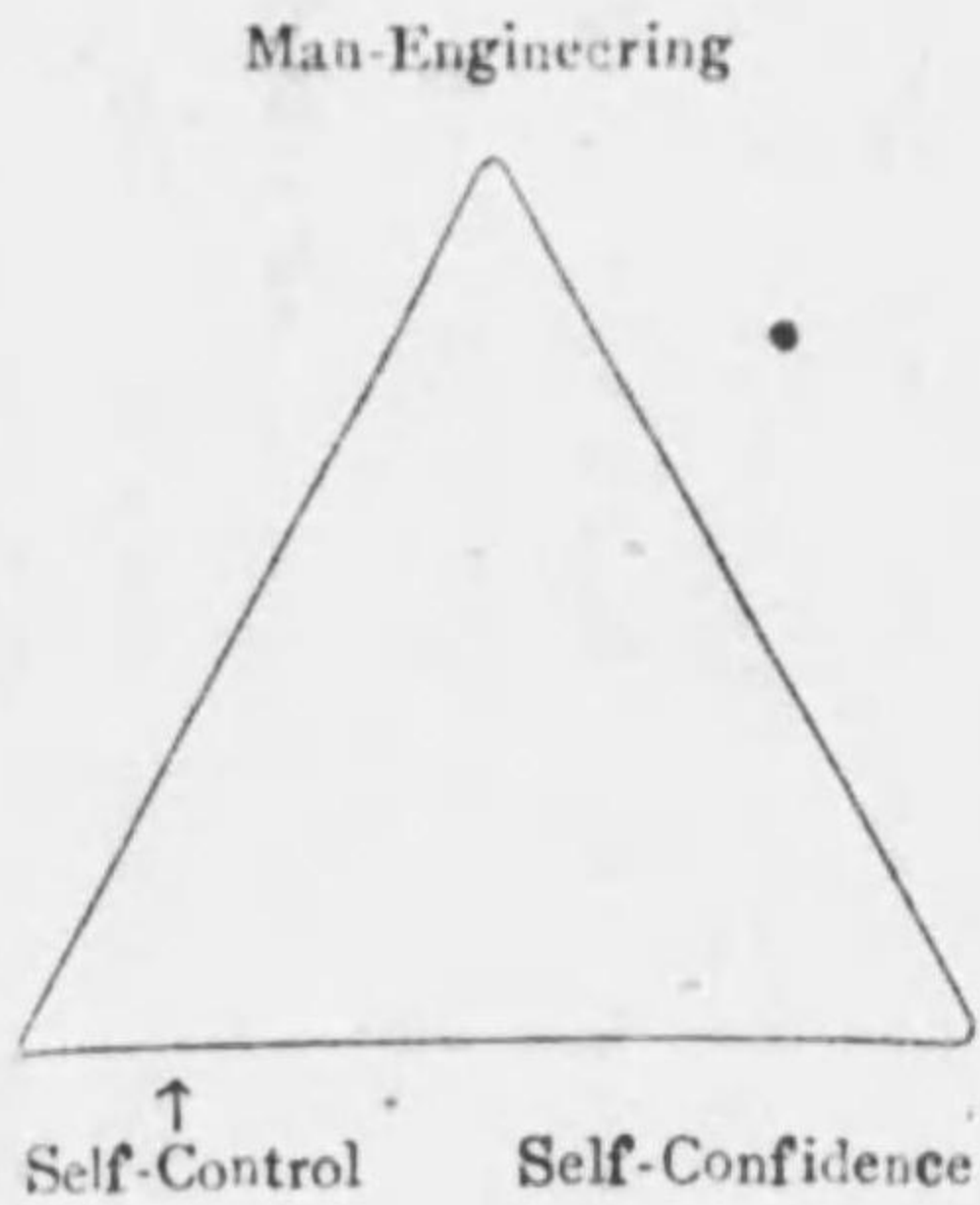
(昭和十一年六月「丁友會報」)

續 洗 心 録

あゝ蛙が泣いてゐる。碓村は昨秋から世田谷區に編入されてしまつたが、依然碓村そのものの舊態を脱却して居らない。成城町と云ふよりは、碓村と呼んだ方がピッタリあてはまる心地がする。やがてはオリンピック村の出現と、もに、只 P. C. I. と Olympic 等の名に於て、

我が碓村は文化の急激なる渦の中にまきこまれてしまふであらう。されば「古池や蛙とびこむ」等の境地は、之等の急テンポによつて、何處かへけし飛んでしまひさうで惜しくてならぬ。

上の構圖は、此の度(五月十三日)小石川の植物園に催された我等の新人歓迎會々場に於て、丁友會の仲間に配布された手拭のテーマとして、山人の提案にか



洗 心 録

る。去る端午の節句の午後、坂本、飯島の兩君が突如來襲、紙と太い筆とを突きつけて、「ッラ書け」と云ふ始末。誠に始末におへぬ手強さであつたので、突嗟の間に氣付いたのが即ち之であつた。

抑々之は、年來私のモットーとして居る處のものである。昨年から冶金の新入生に冶金學汎論を講義する折、開口一番、先づ Man Engineering と云ふ言葉を提供することにして居る。此の言葉は元來私の創始ではなく、たしか十數年前、米國の Engineering Journal か何んかに見つけたものである。然し其時は餘り意にも留めず、その雜誌には「如何なるが M.E.」と書いてあつたから氣にとめなかつた。其後數年、私が身を教育界に投ずるに及び、かねてから人間と云ふものを研究して居つた關係上、ふと此の M.E. と云ふ言葉を想起し、その表現に興味を覺えたものである。由來、私は私の所謂「マン・エンヂニアリング」を若人達に吹き込んで來た。従つて若い冶金技術者達から、時々「大いに先生の M.E. を請賣して居ります」等云ふ手紙をもらふので、若干効果を示して居るものと、ひそかに喜んで居る次第である。

ところが昨秋、學生間に此の言葉の意味に疑義を生じた様なことを耳にしたので、私はある

席上一應の説明を試みた事があつた。幸ひ此の機會を利用して、私の Man-Engineering を丁友會の諸君に提案し、聊か説明をも蛇足することにし、且つ諸兄の御賛同を希ふものである。

*

*

*

外來語を日本語で表示する場合、實際適切な譯語が無いのには屢々閉口させられる。尤もそれを要求するのも抑々無理であらう。特に私の M.E. に於てその感を深うする。仕方がないから先づ「人間工學」とでも申して置く。Self-Control を「克己」、Self-Confidence を「自信」と読んで貰ひたい。つまり十分な克己（自制）と自信（信念）がなければ、人間操縦は到底完成されないと云ふ意味である。Man-Engineering は技術家が人間達成に對する序論であり、且つ結論であり、而も序論から結論に達する迄の道程でもあると切言するものである。

Engineering と云ふ語は、我々工學部の者からは即座に、Art of managing engines と云ふ風に了解されるであらう。此のエンヂンをば「機關」と譯して居る。然しこの語は尙この外に skill or ability と云ふ様な意味を持つてゐる。

英國の詩人 Chaucer は云ふ……

A man hath sapiences three,

Memory, engine and intellect also,

之を私は次の様に解釋する。即ち「人間は記憶、才能、並に智慧の三官能を保有して居る」と云ふのである。此の場合に於ける engine は才能機關と云ふことになるであらう。私の Man-Engineering は art of managing (or Controlling) man を意味する。Art は「巧」であり「工」である。

如上の様な理由から我々工学部の者と私の提案たる Man-Engineering (以下略して M.E. と記す) とは特に密接なる關係を有するのである。それは「如何にして人間を旨く統禦操縦するか」であり、換言すれば「人間操縦に對する工夫」である。然しながら、之を徒らに直譯的に「人をうまくあやつる術」と云ふ風に手輕に片付けられては聊か迷惑する。學業などは如何でもよろしい、卒業してから職工共を旨く使役する術を心得て居れば仕事は樂にやれる等と誤解されては困るのである。苟も最高學府に席を置く者が學問を無視する等と云ふ事は許さるべき筋合のものではない。在學中も卒業後も、専門の學事と技術に専念すべきは申す迄もない事である。

駄足ながら附言しておく、マンはヒューマン即人間を意味する以上、それはウーマン (mine with womb) をも含むのである。

さりながら、技術家とても勿論人間である以上、飽迄も眞の人間として生きるに忠實であらねばならぬ。而かも帝國大學卒業生たる人々は國家のために有爲の材として活動すべき義務があるのである。技術家として自己の天職を全うしようと思へば、その才能を實際的方面に適用する様努力すべきであらう。大なり小なり、我等の仕事の完成に對しては、只自己のみの微力を以ては到底不可能の事と知らねばならぬ。仕事の達成は幾多の外力即有力なる external functions の添加協力を俟つて初めて實現され得るものである。其處に M. E. の重要さが生れて来る。

M. E. は Money Engineering 乃至 Labour Engineering とも關聯する。技術家は工場に立つて斷じて Sandwichman であつてはならない。先づ勤人根生を持たぬ心掛を必要とする。卿等は資本家と職工との板ばさみとなり、徒らに懊惱してはなるまい。卿等は資本と勞力を巧み

に操縦して技能の眞髓を發揮するよう盡力せねばならぬ。私は技術家に資本家や労働者と戦へ
と云ふのではない。卿等はその資本主義を敬ひ、部下の職工を愛せよと勸める。それは卿等の
仕事を愛すると云ふ事に一致することになる。即ち Capital and Labour の間に立つて Safety
link たるべき事を進言する。之が仕事の成就に關する三位一體と云へる。

M. E. の獲得は一の目標を持つ。それは人類社會の文進開發を目指さねばならぬ。それは自
己生存と云ふ小乘の見地ではなく、社會の福祉増進と云ふ大乘的度量に立脚しなければなら
ぬ。此の點卿等の熱慮を希ふ次第である。

*

*

*

私が畏敬する米國の冶金技術家に E. P. Mathewson と云ふ人が居る。彼氏は本年七十四歳
の高齡にも關らず、現在アリゾナ大學に於て大学院學生を指導して居る。氏は嘗て銅業家の
Mecca と呼ばれる Anaconda Smelters の所長であつた頃、世界最大の熔鑪、世界一の反射
爐及巨大なる製銅爐を建設した。而も現代銅製錬界に王者として君臨する反射爐作業の基礎を
作り、銅冶金界に一新紀元を劃したのである。從來反射爐の最高熱能率はわづかに二十五%に

過ぎなかつたものを、廢瓦斯利用の餘熱汽罐設備により一舉にして六十五%以上に昂上せしめ
たのであつた。氏の如きは實に古今獨歩の銅技術者と云ふべき者であるが、尙彼は All round
metallurgist と云へる人間に尊稱されて居る。

加之、彼氏の度量は洪大にして、然も氏は慈愛に充てる温かき心情の持主である。彼は「技
術に國境なし」と云ふ信条を實行し、何人に對しても隔意なき教導を與へてゐる。今より十五
年前氏が五十九歳の折、本邦を來訪するや時の政府によつて旭日勳三等を賜はり其厚意に酬ゆ
る處があつた。歸省の上、氏は幾多の土産物と共に特に日本室を設け、之等の賜物を飾つたと
聞いたのは欣ばしき限りであつた。實に M 氏こそは技術者として達成せる人間のモデルと尊稱
するも過言ではあるまい。

先般、嘗て私が東北帝大に居つた頃の助教伊澤正宣學士が渡米に當り、同君の面倒を M 氏
に乞ふた時の返事の一節を此處に紹介した。

"We have spent a milliohdollars on buildings of u. of Arizona, and are spending
half a million more on dormitories. The money is 45% gift from the government and

the balance to be paid in 30 yearly instalments. I shall do what I can to make Mr. Isawa's visit, pleasant and profitable to him. I often think of the wonderful welcome I received from you and the other good friends in Japan on the occasion of my visit in 1922. How the time flies!

Remember me to any inquiring friends and them. I am happy in my work at the University. The subject I am most interested in at present is, "Human Engineering" or "how to get along with people". My class in this subject numbers 50 students."

之を見て私は非常に嬉しく思ひ老先生に對し更に新たなる親しみを覺えた。若人よ！卿等は之を一讀して即座にM氏の人格が忍ばれる事と思ふ。私は我が鑛業界に於ても此のやうな偉大にして愛に富める人格の技術家が出現するのを希ふものである。就中興味を感ずるのは Human Engineering の言葉であり、それ等研究の若人が五十名を算すると聽いては羨ましい限りである。我が師父と仰ぐ處のマッシューソン氏より此の手紙をもらつて、私は大いに意を強うしたのであつた。私も暇があつたら先生の膝下に飛んで行き、その温顔に接し、彼の大きな手

にふれて固き握手をかはし、氏の教を更に仰ぎたく思ふ。

氏の提案たる H. E. はつまり私の云ふ M. E. と大體に於て同意義と思ふ。氏の云ふ H. E. の主旨は、「如何にして人々と共に生くべきか？」——「仕事達成の道」——「共存共榮の工夫」といふやうに解釋されるのである。

*

*

*

「マン・エンジニアリング」達成獲得の道はなか／＼一朝一夕には出来まい。それは克己と自信を "base" とする。尤も其の外に幾多の factors が必要であらう。多年直接事業界に従事して來た私としては相當の「自信」は持つて居る積りである。尙人並位の克己心はあるやうに思つて居るが、此の點に關しては未だに餘り廣言は出來兼ねるのを遺憾とする。外敵には抗し得ても、内敵にはなか／＼勝ち難い。永年之に苦心しては居るが常に破れ勝ちで、我れながらあきれて居る。然し私は愚娘の結婚披露の席上に於て、來賓の代表として前樞相一木喜徳郎氏の新郎新婦に對する訓話を謹聽した折の一節を思ひ出す。……

「新家庭圓滿の秘訣は實に日々新たなる克己と努力によらなければならぬ」云々……

邊は只平凡なる言辭ではある。然し此の平凡は實に一大眞理を物語つて居る。私等は起立しながら之を耳にして、ひそかに額に汗したのであつた。それは私等舊郎舊婦に對する頂門の一針と痛感したからである。げに尊きは體驗より得られたる平凡な眞理なる哉である。私の克己は未だ未だ足らぬ。今後大いに努力せねばならない。克己さへ完成されたならば、私の *work* は先づ以て九割は獲得され得るであらう。

私等は人間である。人間は常に心に餘裕を持つて居りたい。技術者は兎角コリ／＼、ガリ／＼の嫌ひがある。我等は常に考ふると云ふゆとりを持ちたい。智的動物、道德的動物、藝術的動物にして靈的動物たる我等は、動物の中では最も複雑な種類に屬する。我等が高等動物と自尊する限り、我等がその所謂人間である以上、眞善美三位の充實以外聖の獲得に努力すべきであらう。宗教家は前三者の上に聖を戴くが、科學者は兎角聖なるものを無視したがる。尤も氣狂的な信者は科學を無視して居るやにも見ゆるが之等は論外に屬する。私は眞善美を以て科學の範圍に包含し、聖を以て宗教即ち信仰を區分して居る。科學を對稱的即 *study of relativity*

と考へ、信仰を絶對的境地即 *sphere of absolutism* に置く。此の兩者が相並んで進歩する處に人文の進化を認める。賀川豊彦氏は云ふ……

「或可能性を信するを信仰と云ふ。出来ないと思ふから出来ないが、可能性を信する人間には可能性の世界がある。それは生命の世界であつて、それを宗教と云ふ。だから學問と宗教は衝突しない。學問は横の軸で、宗教は縦の軸を考へて居る。我々は學問の教へられる範圍外に宗教の世界を見てもいゝと思ふ」云々……尙氏は「宗教は神の道であり、神は愛なり」とバイブルの信條を以て結んで居る。ソクラテス曰く「知は一切の初めなり」と。然り、知は一切の初めであらう。然らば、「信は一切の終り」であらう。「信は即ち愛なり」と云へよう。他山の石、大いに玩味すべきものと思ふ。

先日帝大ニースに於て、横田氏は信念教育の妄を論じ、禍根は果して知育偏重かと述べて居る。氏の結論は、眞實な知識に基いて居らなければ健全な信念は得られぬから、近頃高潮されて居る信念教育なるものゝ如きは眉唾ものである、と云ふ様に讀んだ。彼等の主張する信念

教育の眞髓は何物であるかを知らぬ私は、本文を見てむしろ異様の感を起したものである。

信念と云ふ言辭は自信とも關聯し、信仰とも考へられる。鯛の頭も信心からと云ふ俚諺もある。虎と見て石に立つ矢のためしありと聞く。詩人土井晩翠氏の如きは、故人と面語し得るとさへ高唱して居る様である。信念の獲得に對して、學問（科學知識？）の有無はもとより重大な關係があるであらう。眞實の知識に立脚せる信念は、鬼に金棒であらう。然し所謂學問なるものを獲得せざれば、必ずしも信念が得られぬものと速断するわけには行くまい。愛なるものを無視して、其處に信念は生じ得ぬであらう。

學者は兎角ドグマチックになりたがる。我々は常に考ふる餘裕がほしいと云ふのは其處である。法科出の者はよく、「工科出の者は常識がない」と云ふ。然し工科出の者から見れば法科出の者が數の觀念等に乏しく、「彼等こそ反つて淺常識なり」と反言したくなる。何れが是か非か？ 然し工科出の者は「*It is so*」と教へられ、それに慣らされ、それを信條として居るかに見ゆる。此の様な觀念を、絶え間なく動きつゝある人間の活社會に其儘適用しようとする故に往々にして失敗を招き、兎角の批難を浴びる。心すべきことである。我等の心にゆとりがなければならぬと切言するのはそれである。

*

*

*

等しく之雨である。さりながら、それが慈雨ともなり害雨ともなる。吉川英治氏の「宮本武藏」を私は愛讀して居る。その逢春譜に曰く……

「そよ風は雨氣を囁きそめて藤の花の紫は、將に死なんとする楊貴妃の袂のやうに、遽に咽ぶ様な薰を散らしておのゝいてゐる」……

之は雨のいたづらとも見られる。なかなか趣があつて面白い雨であり、無心の雨も吉川氏の筆によつて生きて来る。我等の同人山口青邨氏は、遠く「ナチス」に居つてどんな雨の句をものして居るであらう！

催花雨是散花雨 一様檐聲前後情

と先人は歌つて居る。一と云ふは何時迄も一となつて止まつては居らぬ。一と云うても其のサインにより尨大の相違を示す。尊き汗を流して得た一錢の金は、膏血をしぼりとつた萬金や、收賄の十萬金よりは遙かに尊いのである。單なる數に於てさへ此の通りである。況んや復

雜極りなき人間社會、大宇宙の森羅萬象の中に存在する私等は、餘りに單純に且つ獨善的に生きる事を許されないのである。知育、徳育、信育の外、尙情的教育をも必要とする。技術家としても藝術的、趣味的の教養を無視することは感心出来ぬ。否々、之等こそはドライになりがちな人生に無限の妙味を與ふる重大なる要素であらう。

*

*

*

Mens Sana in Corpore Sano

此の言葉は、大抵のスポーツマンは知つて居る筈である。之は恰も鬼に金棒と同様の句である。ところが、鬼は必ずしも金棒を持つて居るとは限らない。健全なる精神は、必ずしも健康なる身體にのみ宿らないのである。此の句は、

健康な身體に健全な精神の宿れかし、

と云ふ様に解すべきだと思ふ。先人の誰か、これを「宿る」と断定？ したのを、知らぬ間に後人が其儘請賣して居るのは一寸變である。「精神は肉體成つて後に自ら成るので、逆に精神が先づ成り肉體之に従ふのではない」と、何人が考へたり教へたりした事があつたらうか。之

等は識者間に相當論議されつゝある問題である。それは「鶏が親か、卵が親か」等の問題とは似て非なるものがある。昔ながらの鶏と卵の問題は、科學者によつて既にグリが附けられた筈であるが、精神と肉體との關係は依然論議されて居るらしい。

技術者であるからとて、全然無關心で居られぬ事件は山程もある。我等は眼をあげて、天地の不可思議に驚嘆せねばならぬ。ソクラテスは或る宴會の席上、藝術に就いて語るべく求められた時、「今は余がなし得る所をなすべき時期ではない。此の席にふさわしき事は、余のなし得ぬ處である」と、あつさり逃げたさうである。味ふべき事と思ふ。我々は場合と場所を辨へねばならぬ。つまり我々は常に考へ、常に修養を積み、常に精神を練らねばならない。然しながら、私は肉體の訓練を度外視する事を勧めて居るわけではない。健全なる精神と共に、健康なる肉體の獲得をも大いにおすゝめする。軍教も亦大いに可なりである。

*

*

*

私は、四百年前異朝の人によつて書かれたと云ふ、哲人「モンテーニ、隨想録」(關根氏譯)の選抄を讀んで、教へられる事が澤山ある。その中で、「兒童の教育に就て」の一節に、

「星の學問や、第八天體の運行を教へることを先にし、彼等自身の進退を教へる事を却つて後まはしに致すのは最も馬鹿々々しき事で御座る。」

「ブレアデス星座に何の用かあらん。」

金牛宮星座に何の用かあらん。(アナクレオン)

先づ以て、若様に彼等をより賢く、より良くするに效ある事柄を教へ終り、然る後に初めて論理學、幾何學、修辭學の大體をば教へられよ。さすれば、彼は既に判斷力を得て居るから、その自ら選ぶ學藝は間もなく修得し去るで御座らう。

私はブルタークの云ふ所を信ずるもので御座る。即ちアリストテレスはその偉大なる弟子アレクサンドルをして、三段論法のたて方や、幾何學の定理のために時間を浪費せしめず、専ら豪毅、武勇、寛宏、節度及び何物をも恐れざる大安心に關する教訓を學ばしめたので御座る。そして、それだけの事を終るや、なほ年少なる彼にわづか三萬の歩兵四千の騎兵及び四萬五千チキユの軍費をもたせ、全世界の征服に向つて門出せしめたので御座る。然し其他の諸々の學藝をも、アレクサンドルは尊重致した。否、それ等の高尚優美を賞讃さへ致した。けれどもこ

こに快味を感じはしたれ、自らそれ等の事をやつて見ようと云ふ氣には、到底なれななので御座る。

「老いたるも若きも、こゝに生活の基準を學びて、頭に白雪を戴く折のために備へよ。」(ヘルシウス)

之は、エピクルスがそのメニケウスに與へた手紙の初めに云うて居る所、即ち、最も若き者も哲學することを避くる勿れ。最も老いたる者も之に倦むこと勿れ、と申した言葉と同じ意で御座る。かくせざる者に限つて、自分はまだ幸福な生活をする時に達しないとか、もうさう云ふ時代は過ぎたとか、申すやうで御座る……」

モンテーニユの教へは、滾々として盡くる處を知らぬ。「術學」の章に於て、「我等は、他人の意見と知識を貯め込む。そして……否、それでお仕舞だ」とか、又は「夫人よ！ 學問は大きな飾りで御座る。しかも、非常に役に立つ道具で御座る」等々、幾多の痛切なる皮肉に於て大いに悟らせられる處がある。私は卿等に本書の一讀を勧める。

私は、現代日本の虚榮的な false education や、大量製造向きの活版教育が嫌ひである。彼

の義務教育延長案の如きは、本末を誤つて居ると考ふるものである。健康第一義で先づ精神のしつかりした、實際に即する教育をば、愛すべき日本の兒童、第二の日本國民に向つて施すべきものだと思ふ。

* * *
金や設備ぢ、あ仕事は出来ぬ

人の仕事は人がする

人とは即ち眞の人間、眞の技術家、眞の職工を指すのである。其處に、私の M. E. の必要が生まれる。心臓に毛の生へて居ると云はれる林内閣も、昨今漸く目が醒めたと見え閣議に於て、今後は生産的方面の積極的對策として先づ人的要素の育成により、其の補充と向上を決議したとニュースは傳へる。決議したことは、せぬより増しである。然しそれを如何にして實現するかは問題である。それが實現されなければ、決議等は單なるスクラップに歸する。論議は暇つぶしに等しい。今からでも遅くない。大いに人的要素の充實が望ましい。然しそれは今直ぐと云ふわけには行かぬ。

私は、キャビネットの諸公に向つても、特に M. E. を御勧めする。立派なものを仕上げるにはそれだけの準備が必要である。三年や五年位では、間に合はせと云ふ事に過ぎぬであらう。眞の職工、眞の技術家、眞の人間を造り上げる爲には、相當する年月をかさなければならぬと云ふ事は餘りにも當然である。それは、安物の即席ライスカレーの様には參らぬのである。

* * *
昭和十年加茂先生は、丁友會の若人達に「有備無憂」と教へられた。工學部學生諸君に向つてのその「備」とは何かと言へば、それは M. E. が第一義であると、私は力説する。それは仕事の基礎である。それは實に生活の基礎である。技術者たる人間に對して、私はしつこくも眞の生活の基準となるべきこの M. E. の獲得を御勧めする。

我が神風號の大成功は、決して偶然ではなかつた。それは幾多の因縁による。之より先き、佛人ジャビーの失敗は何事を我が航空界に教へたかを考へたい。漸く負傷癒えた彼は、傷ける心を抱いて歸國の途次、ツーマル號の船中に於て、神風號の亞歐連絡飛行レコード達成を聞き、歡喜の涙を送つて來た。彼曰く、「……之は飛行機製作に關して、日本職工の専門的良心が

如何に發達してゐるかを裏書きし、又日本技師達の技術が如何に優越せるものであるかを立證する……」と。彼の見方が流石に要點を衝いて居ると、私は感心した。飛行機は因であり、飛行士は縁をなした。飯沼操縦士等の沈着な日本魂の手腕は、斷じて忘却する事は許されぬ。彼等は堅き決心と共に、心にゆとりがあつたのである。成否の鍵は實に此處に存するのである。

日佛間飛行の第六番手、ドレ氏等の決死的快舉も、荒天暗夜のため又もや挫折した事を惜しむ。死に勝る苦難も遂に恵まれなかつた事は、同情を禁する能はざるものである。M.O.S.に應じ得るラヂオビーコンの缺如は我が日本航空界の恥さらしと痛論する人々の主張も、或る意味に於て尤もと賛成はする。然しながら、之はドレ氏等の失敗に對する第二義的のものであつて、第一義的のものとは考へられない。彼等は氣の毒にもその成功に焦つた餘り、身心のゆとりを缺如したものだと思はれるのである。

今、私は卿等にタゴール著「有閑哲學」(“Philosophy of Leisure” by Rabindranath Tagore)の一讀を勧める。タ翁は世界的の詩人で、且つ哲人である。昭和四年初夏の日、私が

東北帝大在勤の頃、仙臺から東京帝大に講義の爲め出張中の機會を利用して、私は折から狭心症の爲め病床に横はりながら印度及び日本の志士達に警護されて居つた同翁を見舞つた。神の様にノーブルなその風采に接し、合掌を以て挨拶されたその瞬間、私はたゞ彼の純眞なる偉大さに打たれた。その齡古稀に達したる老翁の咽喉よりほとばしる銀鈴の如き聲を聞くだけでも、そぞろなじやかさを覺えた。私は Don't fight against sickness. Don't fight against anything. と忠告したとき、タ翁は微笑を以て之に應じたのであつた。

彼の息子は、私と同年で五十六歳と聞く。今や八十三歳を閱するラピントラナース・タゴール翁は、舊都カルカッタを距る百二哩の僻邑ボアプールのに於て、私財の建設になれるサンデニケタン(平和の殿堂)で、子弟育英に専念してゐる。それは印度の紳士を作ることに重點をおき、理知よりも寧ろ情意の開拓に努めて居る。そして曹子ラシンドラは手工藝家で、父を助けてその學園を經營してゐるとの事である。タ翁は印度の師父と仰がれるガンヂーを崇拜し、相共に民族の獨立運動を畫策しつつあるやに聞く。彼は大の日本ヒイキである。その民族運動は今後日本の日本魂に訴へ、その援助を切望してゐるさうである。

日本佛畫界の第一人者である野生司畫伯と夕翁との對話の一節に曰く……

「私は無類の月を見た。それはあなたの國に於てはあつた。湯槽から眺めた、箱根山の端にかつたあの月、あんなに腹の中までしみ込む様な月が、またと世界の何處にあるだらうか！それは、私を眞の東洋的なエキゾティシズムの世界に遊ばせて呉れた。いや月の世界に……そして私のたとへがたい旅愁を慰してくれたのだ」……と、翁はあの美事な銀髯をゆらして云つた。

有閑哲學に於て翁は云ふ……「生命の溢れる餘剰は意義の世界、人格の世界を生み出さうとする。それは人生の内面に向つて、そこに文化を發展させようとする。それなしでは人間存在の深い意義は失はれて了ふ。そこに閑散の要求、即ち有閑が必要となるのである。此のレージャーとは、決して無爲、怠惰、浪費、そして沈溺の時間を意味せぬ。(それは、所謂有閑マダム輩の有閑とは全然別物である。)それは物心一如の一元論に立却し、動物から明かに人間を區別した詩人の哲學であるのである。有閑は深き思考を生む。そこには創造が生れ出る。之が進化である。之が自由であり、そして愛である」と、夕翁は結ぶ。之等は詩人の聲であり、信

者の叫びである。我等も有閑の道を辿りたく思ふ。

*

*

*

石原純氏は云ふ。「神風號の成功は日本の文化を世界に紹介した。然しどんなに熟練した飛行士でも、あらゆる悪條件のもとにおかれたら、せつかくの目的を達し得ぬであらう。さう云ふ時に何よりも大切なのは、恐らく周到な判断と沈着な處置とであらう。それは決して口で言ふ様に容易なものではあるまいが、之等の點で信頼し得べき飛行士は日本には必ずしも少くはないであらう。之は日本人の一つの誇りとするに足るものと考へる。

僅かの年月の間に、日本で優れた飛行機が作られる様になつた。之は日本人の技術に對する器用さによる。さうした技術の點では、我々は寧ろ安心してよい程である。所が一番懸念されるのは、獨創的な工夫に缺けて居やしないかと云ふ點である。日本の科學が今の様な有様ではなか／＼困難の大問題であり、我等は模倣より進んで、一番獨創的境地を開發したい云々。獨創的の發明又は發見は、日本文化の進展に關して科學界上重要な意義を有する事には、異議のあるべき筈はない。それは科學者の希望である。さりながら、世の中には眞の獨創と云

ふ事は事實あり得るだらうか。就中、我々技術社會に於ては、獨創とか新機軸を出す等と云ふ様な事項は容易に見出されさうにもないのである。獨創せよ！新機軸を出せ！偉人出でよ！大宗敎家現はれよ！大發明家出でよ！と聲をからして叫んで見た處で、それは木だまに響く山彦程にも反響があるまい。

各國はそれぞれの國民性を有する。我等は各自の長所を有する。我等は遭遇したる時勢と、置かれたる環境との重大なる影響から脱却するわけにはゆかぬ。有無相通、需要供給は大自然の理法である。私は、我が工學部の若人に對して徒らに獨創を勧めたくはない。それが猿マネであつてはならぬが、理解ある模倣は大いにやるがよろしい。卓越せる技術の改善は、我が工業界に向つて最も重要な能事であると信ずる。

科學者の夢、爲政者の夢、理財家の夢等々、夢の世の中には愈々夢が多くなりつゝある。世が夢か、夢が世か、聊か判斷に迷ふのは現代の世相である。然し、我思ふ、故に我あり。我信ずる、故に我生くと云ふ位の信念は現實に生きる技術家として持つて居りたい。

*

*

*

それは、昭和十二年五月二十六日の午後五時、羽田の濱に於ける出來事であつた。飛んだ、飛んだ、我が「鳳」が飛んだ。躍進科學日本が誇る超距離機は、なごやかなる晩春の晴れたる空に向つて、夕陽を浴び、快哉の拍手に送られて無雜作に舞ひ上つたのである。わづか二百餘米の滑走の後、ふわりと砂上から浮き上つた。鵬翼二十八米に互る尨大なる怪鳥が、悠々として大空を雄飛するの光景は實に觀物であつた。それは、帝大航空研究所多年の苦心が遂に酬いられたのであり、製作關係者はもとより、我々觀覽者一同も感激に心のどよめきを覺えた。飛翔三十分の後、嘗て飯沼氏を教導せると云ふ藤田大尉の妙技によつて、我等の大鳥は銀と紅のいやみなき翼をすゑたまゝ、恰かもグライダーの如く滑かに舞ひおりて、歡呼の聲にとりまかれたのである。一萬六千キロ無着陸翔破の實現は、やがて世界的レコードを爲し、歐米先進國驚異の的となるのも間のない事であらうと確信する。我等は、更にその日の到來の一日も早からん事を切に希ふものである。

我が親愛なる一千の若人等よ！今後十年——二十年——更に三十年の後、それは卿等が私位の年輩に達した時、果して何物を我が社會文化の上に齎らすであらうか！卿等はその折

「我も人間として生きて居るんだ」と豪語し得るであらうか？ 其頃、私は天國と地獄の間に居つて、卿等の聲を聞くであらう。

*

*

*

大分、夜も更けて来た。指さきもくたびれて来た。このへんで、私はつたないアダジオを以てそろ／＼本文のコードに入る。武蔵野の一隅に位する我が砧の臺地にも、漸く文化の流れが侵入しようとして居るが、まだ／＼砧には夏夏の薫りがたゞよふ。四六時中、その半ばを私は砧の郊外に於て静養と有閑とに費し得るを樂しみつゝ、感謝の生活を送つて居る。朝もやの中におとづれ来る庭の老鶯は、谷わたり一曲を奏でて私の夢を破る。破られたからとて、怒るべき何物をもたぬ。床の中から、その妙音にきゝ耳をそばたてるのである。

砧には大自然の外、紹介すべき古來文化の跡はない。蕉翁の

五月雨のふり残してや光堂

などは、遠く故郷に近き奥州平泉三代にわたる榮華の夢を忍ぶだけの話に止まり、砧そのものとは何のゆかりも持たない。

夏夏やつわものどもが夢のあと

そんな歴史も、此處にはない。さりとして

のみ風馬の尿するまくらもて

など云ふ程のむさくるしい寒村でもない。それどころか、今ではバックカードやドッチ等も動いて居る。ファード等は餘り見られぬが、その代り、ヨボ／＼の人力車が驛前にひかへて御座る。小田急沿線にふさわしいとも云へる。

先日、田舎の親戚がはる／＼わが寓居をおとづれて、蛙のガヤ／＼と泣く聲を耳にして云ふ……「砧も東京になつたと聞いたが、来て見れば全く田舎に居る心地がする」……と喜んで居つた。こと程左様に砧には蛙共が居る。新約聖書にある寓話中、蛙と蛇と獸が横行する個條が録されてゐる。蛙はたゞゲロ／＼と喚き立てる偽哲學者の類、蛇は享樂主義、獸は暴力と云ふ一種のいむべき世相を寓して居る。

砧の改名たる我が成城町にも、蛙と、まむしと、そしてシェファードが横行してゐる。油断はならない。然し寓話にある程の不都合な場合はあまり見當らぬだけは心易い。然し東京のセン

ターには、此の様な寓話的動物は多分にあるやうに見えるのは如何した事であらう。之が文化の賜物であるとしても云ふのか、それならば既に二千年の昔からあつたわけである。どうも文化と云ふ事がわからなくなつて來た。之は、夜がふけて私の頭が疲労して來たせいだとも思はれない。

否々、社會は確かに進展しつゝあるのだ。而も輓近世界大戰に一線を畫いて、ます／＼ハイテンボの一路をたどる。諸君が此の世に生まれ出た頃からの變化はスゲイものである。私の様な微弱な心臓の如きは、何時の間にかけしとんで、殆んど其の存在を認め得ぬ位のものとなつた。つまり、私は現在無心の状態に置かれつゝあるのを幸とする。

*

*

*

學問は日々に進む。分子↓原素↓エレクトロンと、微に入り細を極める。文部省規定の教科書等は、改纂しても改纂しても到底やり切れるものではない。いつその事、小學校の教科書等は全廢してしまつては如何かとさへ思はれる。然し乍ら我等は機械の恩澤、電氣のありがたさを適切に感じる。大枚一千圓也を投じた私の愛器、手マキのヴィクターも十年を閱する間に相

當古物となつた。サウンドボックスは參つた。修繕位ではとても氣に入らぬ爲、遂に新輸入の逸品を代入してやつと悦に入つて居る。丁友會の新作會歌も、これによつて斷然生きて來た。實はモッタイない位である。

夜はうれし晝靜かなる夏の雨

之は樗良からの變作であつて、如水山人の腹から出たものではない。山人の迷句は

畦道に蛙をきくや立ちいばり

と云ふ位の處であり、餘りいばれたわけではないが、題して「碯の情緒」と云ふ。勿論、碯なんかには巡查は居つても名ばかりである。罰金なんかとられる氣づかひはない、泥棒なんかはまだ遙々電車賃をかけて此處までは出張して來ぬ。然し私は念の爲に、私の愛器のため、私の愛刀村正の保護として「熊公」と名づくる眞黒な二歳の秋田犬を飼つて居る。それは八公程の忠實さはないが、ホエルだけは大了なものだ。主人公の私にさへ、夜道を宅へと迎る折、一町餘りもの手前からワン／＼と忠言？して居る。然し彼は主人公に似て、人様に喰ひつく程の強い心臓を持つて居らぬから、來訪の諸君は安心して可なりである。

幾度か脱線して未だに筆をおき切らない。今一言つけ加へる。世の中には、技術の進歩によつてますます優秀なる機械が生まれる。幾百の聲明、幾千の書が發表される事、雨後の筍以上である。然しその書を読み、その機械の用ひ方が問題となる。我等は書を読まなければならぬ。書によまれてはならぬ。我等は研究をせねばならぬ。然しそれにとらはれてはならぬ。我等は機械を用ひねばならぬ。それに使はるべきではない。

我等は、物質文明のために麻痺されぬ確固たる良心と訓練を持たねばならない。之が我が M. E. の達成である。彼のトーマス・エジソンでさへ、死の直前に「宗教を持たなければ機械文明は人類に何等の幸福をもたらさぬ」と云うたさうである。

・ルードルフ・ディーゼルの名は、エンジニアとして知らぬ者はあるまい。その聲名を以てさへ、彼は自らアントワープ沖なる海中に姿を没した。ピッカの名は、高級車として帝都に横行して居る。然し彼も亦、デトロイト市の高屋より投じて地上に耻をさらしたのである。つまり彼等は行きつまつたのである。研究——名譽——尊敬——富を目標とする人々の末路と心情は、憫れむべきものである。私は現代の米國に於て、ヘンリー・フォード以上にエレン・ケラー

を尊敬する一人である。彼女の愛は、斷じて盲目の愛ではない。

マン・エン지니어リングは、人間生活の基準獲得への道である。M. E. の提案に興味を覚え、私と共に之を研究しようとする人々は、遠慮なく我が陋屋をおとづれん事を望む。其處には諸君の腹を肥やすべき何物もない。然し紫外線に富める日光と、清淨なる大氣とは無限に供給され得る。飲料としても、云はゞ限定量のビール位のものど心得られたい。只私の愛器が、私の狭い居間に嚴然とガンバツて居る位が唯一のかざりである。武藏野の閑居に於て、ペーサーズの第六田園の調べを味ふ事も亦有閑なる哉である。

げに我が成城では、草や木が無茶に伸びる。昭和十二年の春、銀座祭りでもらつた銀座の柳の苗木が、今では早や丈餘にスナナリ伸びて居る。人間たる我等の氣も亦、従つてのんびりするのも自然であらう。兄等も、時には此處まで少し脚をのばしては如何。

(昭和十二年六月・「丁友會報」)

昭和十六年三月廿一日印刷
昭和十六年四月三日發行

版權
所有

人間工學

定價一圓六十錢

技術と人生

著者

池田謙三

發行者

池島重信

印刷者

渡邊丑之助

株式會社 科學主義工業社

本社 東京市日本橋區兜町二ノ十七

支社 大阪府北區宗是町(大阪ビル)

出張所 名古屋市中區廣小路通七ノ二(日本火

駐在所 福岡市中區島町六

振替(福岡)三八四五二番

發行所

(發行所印刷)

關笠象三郎譯著	アメリカは戦ひ得るか	千價一・六〇〇	猪谷善一著	日本貿易論	千價四・〇四〇
松前重義著	東亞技術體制論	近刊	上田貞次郎著	戦時經濟講話	千價三・〇四〇
松前重義著	科學・技術・思想	千價一・三〇〇	*	*	*
石原純著	科學のために	千價二・三〇〇	ハウスホーファー著	地政治學の基礎理論	千價一・五〇〇
美濃部洋次著	經濟生活の日本的轉換	千價一・五〇〇	玉城肇譯	地政治學論	千價一・五〇〇
豐崎稔著	日本經濟と機械工業	千價一・三〇〇	阿部市五郎譯著	地政治學論	千價一・八〇〇
大河内正敏著	生産第一主義	千價一・三〇〇	景ハ山ウ杏平譯著	極東地政治學	近刊
輝波義等著	生産と労働	千價一・八〇〇	田メ間ル耕一譯著	制海權	近刊
宮本武之輔著	技術者の道	千價一・五〇〇	渡シユトイ晴エ譯著	ドイツ封鎖經濟	近刊
三枝博實著	技術家評論	千價一・五〇〇	松ホラ山ピ博譯著	近代世界經濟史	近刊

915
62

終

